

先生について居る。井井居士を誤らせたのは俺達だ。氣の毒だつた。お前は良く先生に孝養して呉れ」と言はれたことがあります。先生が「朝鮮事件は俺が不明だつた」と云つて後は一言も云はなかつたのは、政治家が責任のなすり合をするのと餘程違つて居るので先生の人格が惚ばれた。

伊藤公は其の當時大磯に滄浪閣と云ふ家を持ち、又小田原には妾を圍つて居て度々出かけ、其の度毎に必ず先生の家を訪問され、何時も朗かな談笑の聲を私は隣室で聞きました。先生は一生世に出ないと決心して東京の本邸と小田原の別荘獨抱樓とに往來して居た（獨抱樓は上海の有名な學者沈子培氏が訪問した時に名づけた）。

### 先生の晩年

當時の井上文部大臣が無理矢理に引つぱり出して帝國大學の教授にした。當時島田重禮氏と竹添先生が東京大學の支那學の雙璧として支那學界に稱せられて居た。先生は肺と胃の病氣で退職して主に小田原に居て著述に没頭し、明治三十五年頃に左氏會箋が脱稿された。此の本は色々な本を參考にして居ます。宮内省の圖書寮に御寶藏になつてゐる三十軸の左傳で校訂をした。其の校訂の任に當つたのは島田翰氏です（二十三歳位で古文舊書考を書いた有名な目錄學者）。先生は又毛詩會箋と論語會箋に取りかゝつた。

左氏會箋が出来上つた時に學士院から一千圓か二千圓の賞金が來た。其の後私が支那に行つて居る中に

文學博士になつた。

私が先生の別荘に居候をして居ました時に私の郷家が財産を失つて何か日稼ぎをしなければならぬ様になつたが、先生の側を離れるのが惜しくてたまらない。先生は私に小田原に塾を作れ、其の月謝で母を養へと云はれるが、私の學問では自信がなく躊躇して居ました處、先生は土地の人々に頼んで寺の一角を借りて、さあやれと云ふので私は引き受けてしまつた。然し私一人では覺束ないので先生が土曜日に論語の通俗講演をやつてやると言はれ、又當時文部大臣をやめて小田原に居られた吉田松陰門下の野村靖子爵が月曜日午後三時に、吉田松陰傳の話をして下さるので、生徒が一時に五十人餘りになつた。私が午後二時から六時迄、十四、五歳から四十歳位の生徒をゴツチャにして教へた。豫習する暇がないので字引を手につけて教へました。先生は其處を誠意學舎と命名し、揮毫して下さつた。井井夫人が月謝全部を保管して先生の處に持ちこませ、郷里の母に毎月夫人から送金して呉れた。かう云ふ様に門人に對する世話も私ばかりでなく親切にしてゐた。明治四十一年に私は支那に行くことになりまして、支那の學者に對する注意を受け、先生に做つて紋付羽織と袴を携帯して行きました。

毛詩會箋は脱稿して出版に着手し、二冊だけ先生自ら校正して終つたかと思ふと七十六歳で亡くなられた。毛詩會箋は出版されて後は先生の校正でなく外の人がやつたものらしいです。

奥さんは一年前に死んでしまつた。其の時に奥さんの死を悼んだ十九首の詩があります。奥さんの内助



の功は非常なものです。

一寸後戻りしますが左氏會箋の原稿が成りかけた時に、小田原の海嘯で別荘は流された。先生は東京に療養中でしたから島田翰氏は留守居をして居つた。三十冊の原稿を頭に巻きつけて海水の中を逃げた事があります。別荘は其の後又建ちました。それから論語會箋は最後の著述で私はまだ見ません。崇文叢書の中に割り込んで入れてある様です。私は凡根で學植が乏しいので先生の教を充分に收得することが出来ず、況や先生の著書の批判をする力がないので、こゝに詳説し得ないのを遺憾に存じます。

先生の著書では棧雲峽雨日記が一番有名です。先生の編纂されたものでは孟子論文が廣く讀まれた。もう一つ編纂されたのは元遺山文鈔があります。先生の眼光で選んだのですから良いです。

それから退官された後は大學生を一、二人備つて英語の本を讀んで居られた。主に經濟や政治の本でした。ウエブスターの大辭書が手垢にしてみても書庫にあつたのを見ますと、先生は餘程骨折つたと思ひます。

先生は最初龜井學派に學び、後木下師で宋學を究め、進んで清朝の考證學に深入りされた。漢宋折衷派に屬する人の様に思はれます。考證された中に往々宋學がひらめいて居る様です。之はよい事か悪い事か知りませんが、文章が一番長所の様でした。晩年は經學に没頭された。文章を作られる時の苦心と言つたら實に血が滲む様に力を用ゐられた。先生の文は一年以上かゝらないものはありません。最も難しい碑文等は三年以上推敲された。晩年の力作は橋本綱常子の碑文で丁度五年かかつた。此文は私が取次で王先謙

先生に示して只一字を改めました。先生は碑文と云ふものは容易に書けるものでないから請負ふものでないと言はれて居た。日本で古今の學者を通じて島田重禮先生の文章だけは貫祿があると非常に賞めて居ました。私共修業中の者が山陽の文等を読むのでないと戒められた。先生が時折の雑話を綜合しますと、先生は初め政治家になる積りだつた。維新當時であり才氣勃々たる先生は腐儒的學究ではなかつた様です。併し南船北馬の間に讀書を廢せられなかつたのは、晩年に醇儒となられた素地を爲したのでせう。當時新人物の需用が多々益々辨する時、殊に上には勝海舟、大久保、伊藤諸氏が居つて、先生が引つぱり出されたのは當然無理もないことである。私が先生の處に出入りしましたのは長い年月です。先生の家に居候をしたのは四年間位でした。

(昭和九年九月)



## 雲南に於ける日本詩僧の遺韻

佛教東漸の關門であつた雲南は、支那の文化の中心と遠い距離を保つてをるに拘らず、佛陀の餘香は斷續的に印度方面から馨つてをる。南詔野史に散見してをる僧徒の活躍振りでも分かるのである。雲南各部落の長に印度系の人が少くない。白崖國は西天竺の摩竭國阿育王低蒙直の第八子が白崖に居つたので國號とした。細奴邏には西天竺の阿育王低蒙直の第五子の蒙直爲の三十六世の孫生有奇が居つて、老僧が奇術を行うたことが出てをる。それは唐の貞觀の頃であつた。閣邏風には唐の天寶年間に韓陀僧が奇術を以て、唐の軍を撃破つた。

南詔王勸龍晟の時（唐の元和年間）に佛尊三體を鑄て佛頂峰寺に安置し、金三千兩を用ひた。

滇王豐佑（唐の長慶年間）は天竺僧贊陀囉哆に鶴慶の元化寺を建立させた。寶曆年間に大理の崇聖寺を修理した。嶺南寺の聖僧李成眉は高さ三十丈の塔三基を建て、四萬五百九十斤の銅を用ひて佛像を鑄た。

世隆（唐の大中年間）の時、高眞寺の僧崇模は妖術を用ひ藏暮に水を呪して酒となし士卒を飽醉させ、彼は蝶に化けて宮中を亂した。世隆の妻が隆に告げたので、隆は其妖僧が再來した時は、法衣の背に蝶を繙うて置けと命じた。其後僧が來て蝶のついた法衣を着てをるのを見て隆は其僧を斬つた。

元の時代までも僧侶は優勢で、大理の盤龍寺の僧蓮峯が奇術を行つて國王に尊崇された。

以上は小説めいた南詔野史の記事であるが、雲南の印度僧も來て居つたし又支那僧も多く居つて、羽振りがよかつた事が思はれる。

日本から入込んだ僧侶で雲南まで深入した事迹は唐宋時代には記録を見ることがないが、元末明初には五山の名僧が雲南の奥までも足跡を印してをるところを見ると、雲南に高僧智識が居つたことも想像される。

## 日本詩僧の詩

明初の都督沐昂の編纂した滄海遺珠と云ふ四卷の詩集がある。雲南叢書の中に採收して一冊になつてをる。其中に日本僧の名が三人出てをる。天祥、機先、大用の詩が卷末に載せてある。此の三人の中二人だけは五山文學列傳や五山詩僧傳に出てをる。日本でも堂々たる禪師である。其中機先と云ふ人だけは私には尋ねあてることが出来ない。

天祥、名は一麟、一庵と號す。始め天祥と號す。京師の華胄九條家の庶子なり、元徳元年（足利時代）に生る。幼にして建仁寺大中庵の東海源に依りて童役を執る。十七歳にして得度し、南禪寺建仁寺の間に遊ぶ。永和三年薩州の大願寺に住し其後筑前博多の聖福寺、京都の萬壽寺、建仁寺等に住す。應永十四年



十二月二日遷化す。壽七十歳。辭世の偈に、

有有有有有。無無無無無。裂破鐵絲網。擊碎瓔珞珠。

支那に遊び柳子厚の文法を傳ふ。其書室を「泉聲幽處」と云ふ。著書に、

佛祖歷年圖二卷、藏叟箋十卷、語錄二卷、龍延集一卷、(以上五山文學列傳五山詩僧傳抄出)

江村北海の日本詩史に、「曹學佺の明詩選に日本僧天祥の詩十一首、機先の詩五首を載せてあるが、二僧は支那では大に賞せられて居るが、我邦には湮晦してをるのは歎すべし」と書いてある。

滄海遺珠の編者沐昂は、明の初代太祖の時の人である。明詩選の編者曹學佺は明末萬曆時代の人であるから、明詩選に載せてある天祥の詩は滄海遺珠のをそつくり採つたものらしい。

寄南珍 天祥

上人居處僻。心與石泉清。道在從違俗。身閒不用名。空階松子落。雨逼蘚花生。怪得稀相見。年來懶到城。

贈李生 同上

異域無親友。樹懷苦別離。雨中春盡日。湖外客歸時。花落青山路。鶯啼綠樹枝。從今分手後。兩地可相思。

呈同社諸友 同上

君住峰頭我水濱。相思只隔一孤雲。夜燈影向空中見。晨磬聲從樹杪聞。咫尺誰知多役夢。

尋常心似遠離群。今朝偶過高栖處。坐接微言到夕曛。

夢裏湖山爲孫懷玉作 同上

杭城一別已多年。夢裏湖山尙宛然。三竺樓臺晴似畫。六橋楊柳晚如烟。青雲鶴下梅邊墓。白髮

僧談石上緣。殘睡驚來倍惆悵。可堪身世老南瀛。

暮春病懷 同上

落花滿地雨絲々。九十春光又別離。行樂送春猶有恨。那堪多病過花時。

榆城聽角 同上

十年遊子在天涯。一夜秋風又憶家。恨殺葉榆城上角。曉來吹入小梅花。

此詩は雲南通志の藝文志に一首載せてある。日本僧とも何とも書かず外に多くの詩の中にまじつてをる。雲南通志の編者は支那人と思つてゐたであらう。

以上は十一首中から抄録した。天涯萬里の旅情が綿々として紙表に溢れてをる。又僧俗間の應酬の詩の中には、當時杭州蘇州に居た天祥の湖山の風光に憧れてをる情緒が見え、暮春の詩には病床で花時を過した旅僧の客愁が涙ぐましい天真さで惻々として人に逼つて来る。詩の聲韻格調も和臭を洗脱して、他の詩人と比肩して劣つてをらぬ。其頃の五山僧の學植も窺はれる。



長相思

機先

長相思相思長、有美人兮在扶桑、手攀珊瑚酌霞氣、口誦太乙朝東皇、鯨波摩天不可航、矯首欲渡川無梁、去時遺我瓊瑤草、蠶履半幅雙鴛鴦、鴛鴦不飛墨色改、攬涕一澀斷腸、前年寄書吳王臺、西湖楊柳青如苔、今年東風楊柳動、鴻雁一去何當回、欲彈朱絃紫斷絕、欲放悲歌聲哽咽、孤鶯夜舞南山雲、花漬簾前杜鵑血、思君不如天上月、夜々飛從海東出、月明長傍美人身、美人亦近明月輪、寒衣把酒問明月、中宵見月如見君、長相思長如許、千種消愁愁不舞、亂絲零落多頭緒、但將淚寄東流波、爲我入扶桑去。

雪夜偶成

同上

畫角聲殘曙色遲、雪花如掌朔風吹、吟中二十年三昧、未了梅花一首詩。

以上は十八首中から抄出した。第一首の長篇は日本に居る舊師か又は友人を思ふたものやうである。「美人あり扶桑にあり」と云ふ句でさう思はれる。この才華爛漫たる詩筆は、李太白や蘇東坡の呼吸を吞み込んだものである、練々として窮せない。そして奔馬のやうな勢がある。抹香臭いところは少しも見えない。此外に瀟陽六景の詩もあるが、こゝには割愛する。此の非凡な詩僧が日本内地に知る人の少く事跡を尋ね得なかつたのは遺憾である。

大用、名は有諸、字は大用、幼にして太清宗渭の門に投じ參詳功を累ねて印可を得た。後播州の寶林寺

に住し又建仁寺南禪寺等に住す。應永二十年南禪記を著はし、永享四年雪村大和尚行道記を著はす。其生死年月壽臘を詳にせず。其著書左の如し。

法華撮注八卷、獅々吼集、南禪記、五燈錄抄、雪村大和尚行道記、(五山詩僧傳抄錄)

輓述 光古

大用

氣宇自豪邁。孤超傲世時。冥鴻沖漢志。野鶴出塵姿。筆勢雲烟起。詩名草木知。論交二十載。死別抱長悲。

大用は五山の名僧であるが、支那に遊んだ記事は、五山詩僧傳にも五山文學列傳にも見えて居らぬが、天祥と時代が近い。足利義滿や義持の頃である。滄海遺珠には此一首だけを擧げてゐる。此詩はお弔の詩である。まだいくらかあつたであらうが、傳はらないのは惜しい。

支那人の側から日本僧に贈つた詩が二首滄海遺珠の中にある。其日本僧が前出の三人のうちか、又は別の人かは私に分らぬが左に掲げたのがそれである。

贈日本僧演此宗 曾 烜

達磨居嵩九載期。此宗寂寂有誰知。生從日本精三藏。老向雲南禮六時。香滿墨池臨舊帖。花明春塢詠新詩。別來應有驚人句。好寄東風慰所思。

寄演此宗

平 顯

雲南に於ける日本詩僧の遺韻



秋風起江漢。織月在西南。影落清瀟水。涼生白石龍。唱酬蔬筍氣。夢寢葛藤談。未遂依禪寂。徒慚雪滿簪。

此等の日本詩僧は詩が巧みと云ふばかりでなく、禪門に於ても堂々たる名僧である。日本で鍛へあげた道力をもつて、更に支那の高僧達に参じて磨きをかけたのであるから、當時支那の桑林でも尊重されたに相違ない。前に掲げた曾類の詩の中に「生きて日本より三藏に精しく、老いて雲南に向つて六時を禮す」とあるのを見ても、年をとつて雲南に来て修道して居つた面影が彷彿として想像される。其他應酬の詩は皆親情のこもつた温かい文句で後世の讀者に當時のなつかしい道の交りを思はせる。

鎌倉時代から足利時代にかけては、日本の佛教も隆盛であつて、傑僧も輩出して全盛を極めた時であつた。そして小船に乗つて風濤の險を冒して、支那に渡つて的々と修行した。其足跡を雲南の奥まで印して、其餘韻の馨るのが前出の詩僧の詩である。彼等の旅路の行程や生活の状態も、考索してみたら興味多いものであらう。此處には其片鱗を擧げたのみである。

(昭和三年十二月)

## 蘇曼殊について

曼殊闍梨、名は玄瑛、姓は蘇、非凡の天才を抱いて三十五歳の短生涯を了つた。詩に畫に文に佛經に各造詣があつた。柳亞子が編した曼殊年譜と曼殊新傳にその生涯が織出してある。

驚くなかれ、彼はもと／＼日本人であつた。彼の父は宗三郎、母は河合氏、彼の幼名は三郎、後宗之助と改めて江戸に成長した。彼は生れ落ちてから不幸であつた。生後數ヶ月で父は死亡した。哀れな母子はよるべなき悲境に泣いて居たが、縁とは不思議なもの、母子とも廣東の巨商蘇某に一切を庇護され廣東へ連れ去られて異郷に新生活を開いた。彼は蘇姓を冒ぎ名を玄瑛、字を子毅と付けられて、舊名の宗之助を脱ぎ棄てた。時に彼は五歳であつた。蘇家の正妻は彼と彼の母を虐待し、到頭居た、まらなくなつて、彼の母は泣く泣く彼を残し日本に歸してもらつた。残る彼の身境は一家親族等の侮辱と苛遇のみであつた。義父蘇は彼を香港の西班牙人に託して語學をやらせた。不運にも二年の後に蘇某も病歿したので、歸宅してみると酷遇益々加はる、唯獨り異母兄が彼を陰に陽にかばつただけである。

彼は十二歳の時、廣州の長壽寺に入つて剃髮得度した。曼殊の號は此時からである。不幸にも其寺が廢毀されて、彼の巢は又覆つた。彼は母を戀うて日本に来て母子睦じく神奈川に住み、二年間上野の美術學



校に學び、早稻田に三年政治學を修めた。

支那公使汪大燮は彼の才氣を愛して士官學校に入れたが、彼は軍人たるを好まず八月で退學して又浪浪の生活に入り、遠遊の志望を遂げんと、香港の舊師西班牙人の助を得て暹羅に入つて佛典や梵文を修め、二十歳の時、杭州西湖の靈隱寺に歸つて、梵文典八卷を著はした。

當時革命の下火が殷々として地底に燃えて居る時に、新進の文豪、章士釗、陳獨秀、劉師培等に見出されて提携し、彼は天才を新聞雜誌の詩壇・論壇・儲壇や翻譯欄に發揮した、彼は著髮僧となつた。或は學校の講師となつて安徽・湖南に出沒した。再度國境を離れて暹羅・印度に遊び、修佛の傍ら印度志士と握手した。南京に歸つて楊仁山居士の下に祇垣精舍の講師となつた。或は肺を病んで日本に渡つて母子二人で返子に靜養したり、又走り歸つて革命志士と奔走したり、長舌を振ひ椽筆を提げて起つた。彼の波瀾重疊の生涯は民國七年に閉され、哀れ三十五歳で佛となつた。

是の如き逆境に浮き沈みつゝ、之を順用して短時に收得した彼の學問藝術がいかに優秀であつたか、天才は云ふ迄もないがその刻苦耐忍は、到底尋常人の及ぶ所でない。彼はもとく日本人だからえらいとは私は云はない。寧ろ支那に於ける虐待と趨勢が彼を此の如く成したと云ふ方が公平と思ふ。

詳細は曼殊年譜と曼殊傳に出てをる。私は曼殊全集を八月の初め、上海の新刊廣告で見て、早速取寄せ、さつと通觀したばかりで批評するのは輕率であるが、ありのままの讀後感を抄述して見よう。

第一冊 詩集、自畫、バイロン詩の漢譯、文集、書札

第二冊 嶺海圖光錄、燕子籠隨筆、翻譯小説

第三冊 斷鴻零雁記、天涯紅淚記、絳紗記、焚劍記、碎香記、非夢記

今日迄は右の三冊だけ出てをる。

彼の詩は大家に比肩する程に洗鍊されては居ないが、眞情が流露して熱血が大きく脈を打ち、詩に波立たせて彼の性靈を跳らせてをるところは、未熟は免れなくとも、老大家が持合せないものを持つてをる。

從來漢詩人の陋習として、詩會の課題、或は酒の肴に漫吟する。その實境は極めて不眞意なるにも拘らず誠しやかに涙を入れたり、愁を加へたり、飲めない酒に酔つたふりをしたり、悲しくないので泣聲をはめてみたりして、虚偽の雕刻をして平氣で良心麻痺して居る一派もある。此等は名作ができて刺繍の美人と同じである。生命なき詩の模型に過ぎないが、曼殊の詩にはそれは見出せない。

彼が東京に来て母子ぐらして居ながら支那の友人を憶ふ詩に、

九年面壁成空烟。萬里歸來一病身。淚眼更誰愁似我。親前猶目憶詞人。

秋風海上已黃昏、獨向遺編弔三拜論。詞客飄蓬君與我。可憐異域爲招魂。

眞率な、いや味のない所と、彼の愛國の悲憤が多く詩歌文章ににじみ出てをるのが特長と云へよう。



文集の中に潮音の序の英文がある。その一節を摘録する。彼がバイロンの共鳴者であつたことも一興である。

Byron was born and brought up in liberty, wealth and liberty. He was an ardent and sincere devotee of liberty;—yes, he dared to claim liberty in every thing—great and small, social or political. He knew not how or where he was extreme.

書札の中には名文がある。當時の交遊も當時の時勢も文中或は言外に釋ねる事ができる。友人柳亞子に與へた手紙に、

別後甚だ相思ふ。聯月一字も書かないので音信を絶つてをる。秋さむく石やせる時に君は恙ないか。

舞子海濱圖は異域にさすらうて居る者が終日眺めあかぬものである。

彼が琵琶湖の畔で病氣が再發した時、友人葉楚傖によせた手紙に、

琵琶湖に来て病氣が大に再發した。逆旅の主人が信切をつくしてくれるので、自分は彼の天心仁愛を大に感じてをる。此邊は三山の勝景である。然り河山は誠に美しいが吾が土にあらず。小鳳(私)は我が経鉢飄零してをるのを思つて呉れるだらう。

前書も後書も共に無限の感愴をサラリと打ち抜いて無量の感を人に與へる。尋常才人の涙でなく、裏に憂國の血が迸つてをる。隨筆の「嶺海幽光」は彼の自敘的のもので、當年彼が廣東を去來してをつた時の

人物や風致や感興が見える。

「燕子籠隨筆」は文彩に富んでをる。

小説では佛文翻譯の「慘世界」も上手な譯筆である。

「斷鴻零雁記」も彼の自敘的小説である。此の外に天涯紅淚記、絳紗記、焚劍記、碎簪記、非夢記は共に流麗の筆致である。私は小説を批評する能力がないので差控へる。彼は西班牙人の先生から才氣を見込まれて彼に娘を嫁せんと申込んだこともあつた。日本の母姉等は還俗後の彼に妻帯をすゝめたが、いつも僧侶に出發したことを説いて謝絶した。宿命を説くのも變だが、彼は生れ落ちてから父に縁が薄い。廣東の養父も然りであつた。彼が若し妻帯して居たらば短命な彼は孤兒を遺したであらう。然るに彼は自ら受けた苦境を後に残さなかつた。

彼は短い一生に斷續した苦境逆運を盡く順利用通して良き收穫をして天才を練磨した。天が今年か二十年を彼に假すことを吝まなかつたら、複雑な彼の藝術學問を更に向進統一して一大家となつたであらうが、遂に未成の珊瑚で終つた。

私は曼殊とは只一回上海で面會した夙縁があるので、此の全集を読んで彼が極く短い光陰を自己の修學に利用してあれ程になつたことを、偉大と思ふのである。



五臺雜俎

なぜ五臺山と云ふか。東臺、西臺、南臺、北臺、中臺の五の山があつて、その頂上は平坦で、そして樹木がなく臺の状をなして居るので五臺山と云ふ（五臺新志）。

年中堅い氷がつもつて、夏でも雪がとぶ。更に炎熱を知らないので、清涼山と云ふ。五の峰が聳えて、頂に林木がなく土を疊んだやうであるから五臺と云ふ（華嚴經疏）。

五臺は代州の五臺縣の東北一百四十支里のところにある。道教の經典には紫府と稱してをる。佛教では清涼山と名づけてをる（寶字記）。

五臺の名稱縁起はこれでわかる。五臺山の研究には各専門家が必要である。植物、花卉、藥草の類、礦物も昔は銀を採掘した記録がある。

五臺の佛教

五臺山の佛教か、佛教の五臺山か、兎に角道教もあるが佛教が主になつてをる。漢以來此山に集つて繁昌した靈場である。浙江の普陀山、天臺山、江西の廬山（今は廬山の佛跡は殆ど消滅した）、湖南の南嶽、四川

の峩眉山と對峙して山西の五臺山は支那佛教の根據地の一である。多数の高僧が輩出した。唐宋の時代には日本の高僧等も五臺の靈境に修道した。その一例を支那の記載に求め、左の記事を見出した。

唐の大歴年間（我が稱徳天皇、光仁天皇の朝）に日本から靈仙二人の僧侶を五臺に派遣して修業をさせた。又會昌年間（我が仁明天皇の朝）にも日本僧が來た。宋の雍熙（我が圓融天皇、花山天皇の朝）の初に、日本僧齋然が五臺山に參詣を請うて許され、道中の食物も五臺で修業中の食費も宋の政府から支給された。二年の後に齋然は歸國して、禮狀をよこした（五臺新志）。禮狀左の如し。

金闕曉後、望<sub>ニ</sub>堯雲於九禁之中、巖扁晴前、拜<sub>ニ</sub>聖燈於五臺之上、就<sub>ニ</sub>三藏<sub>一</sub>而稟<sub>ニ</sub>學、巡<sub>ニ</sub>數寺<sub>一</sub>而優游<sub>ニ</sub>遊<sub>ニ</sub>遊使<sub>ニ</sub>蓮華回<sub>ニ</sub>文、神筆出<sub>ニ</sub>於北闕之北、貝葉印<sub>ニ</sub>字佛詔傳<sub>ニ</sub>於東海之東。（宋史外國傳）

唐宋の頃は支那の佛教も眞劍に研究されて居つて、上は天子より下は百官有司迄、立派な修道者もあつた。就中唐は盛んであつて、詩文に現はれて居るところで見ても佛教の感化がわかるのは、選練され清淡な味である。宋以後の詩文のコッチリした濃厚さに比して唐のは清淡な高さがある。

日本僧ばかりでなく印度からも高僧が往來してをる。番僧とかいてあるのには、支那境外の蒙古西藏其他から多くきて居つたこと、思はれる。

今語園から五臺山に出入した高僧の名を拾ひ舉げて見ると、  
摩騰、法蘭（印度）漢の孝明帝の頃 靈辨法師 魏の熙平の頃 祥靈大師 齊



令休大師	隋	仰山和尚	唐	法空大師	唐
窺基法師	唐	光嶼和尚	唐	道宣律師	唐
金光照師	唐	清涼國師	唐	業方大師	唐
豐干禪師	唐	志遠法師	唐	巨方禪師	唐
無名和尚	唐	祕魔和尚	唐	智顛大師	唐
鄧隱峰禪師	唐	取性道者	唐	智通禪師	唐
必救都綱	唐	趙州禪師	唐	太原孚上座	唐
降龍大師	唐	道忍、道超、道信	宋	慧悟大師	宋
成覺大師	宋	善慧大師	宋	蘇陀室利	金
慧洪大師	金	法中大師	金	佛日圓明	元
正順大師	元	眞覺大師	元	仲華大師	元
弘教大師	元	雙峰金禪師	明	大寶法王	明
具生吉禪尊者	明	釋迦也失尊者	明	大巍禪師	明
孤月禪師	明	慈山大師	明	龍樹大師	明
楚峰和尚	明	無邊禪師	明	瑞禪師	明(清涼山志)

五臺山の寺は、漢の孝明帝の時、印度僧の摩騰と法蘭が来て以来、明朝迄に知られた寺が五臺についてあるのが六十四箇寺、南臺外のが九箇寺、東臺外に九箇寺、西臺外に九箇寺、北臺外に九箇寺あつたさうである。今日は大に滅滅してをるが、昔は五臺山は寺だらけであつたらう。

五臺山の神話

(1) 文殊の化身

漢の明帝以前佛教が入らない時は、五臺山の名も知る人が少く、虎豹のすみかとなつて居つた。或時五峰に光明が發して夜には神燈が懸つたので、土人は神の都が現出したと思つた。而して五の巒を結つた仙人が居つて、三すじの縷を衣物にして、獨りで出て来る。村の小兒等が追駈けて行くと、儼然たる姿を仰ぎ見るがフツと消えて仕舞ふ。此仙人は周の時代にも居つた。後漢の時にも見えた。道教では神仙として説き、佛教には文殊の化身と云つてをる。

(2) 乞食の女

元魏の頃靈鷲寺では春の三月には無遮齋と云つて誰でも来て食ふやうに供養をする。一人の貧女が子供二人と犬一匹をつれてきて、身に持つものがないから自分の髪を剪つてお布施をした。彼女は和尚に向つて「自分は急いで行く所があるから齋を出してくれ」とたのむので、和尚が三人分のお膳を出すと「犬に



も下さい」と云ふので和尚はイヤ／＼ながら與へる。彼女は「私の腹に子が宿つてをるから此子にも下さい」と云ふので和尚は怒り出した。「慾張り奴、腹の子はお前の胎で食べてをるのぢや」。貧女は叱られると即時に一首の偈を説いた。

苦瓠連根苦。甜瓜徹蒂甜。三界無淨處。致使阿師嫌。

と唱へるとすぐ身を虚空に跳らせて菩薩の姿に化し、犬は獅子となり、子供は二天童となつて、瑞雲縹渺の中からまた偈を唱へた。

衆生學平等。心隨萬境波。百骸俱含靈。其如憎愛何。

其時此の光景を見て居つた數千人の大衆は、泣いて空を仰いで、「どうぞ平等の法門を示して下さい、私どもは教を奉じて行ひます」と叫ぶと、又空中から偈がきこえた。

持心如大地。亦如水火風。無二無分別。究竟如虚空。

此偈を與へて冉冉として天に昇つた。

(3) 仙人探し

靈鷲寺に三沙彌が居つて、此山に仙人が多いときいて、仙人に逢つてみたいと思ひ立つて、三箇月も探して逢へないので、樹の下に憩んで居ると、巨人が嶺から下つてくる。その全身は眞黒で漆で塗つたやうであり光明がさしてをるので、沙彌はその前に跪いて、「聖者よ、どうぞ道術をお授け下さい」と云ふと、

巨人は大に罵倒し、沙彌を突きつけて行くので、沙彌は追駈て二三里も行くと、巨人は大きな石穴の中に飛込んだ。沙彌は驚いて居ると雲の中から一人おりてきて沙彌を招いて一緒に石穴に入った。數十歩の處は眞暗であつたが、奥の方は光明遍照で、碧琉璃の空には明月が日輪よりも照り耀いてをる。その人が沙彌に酔酒を授けて、之を飲むと得度すると云ふけれども、沙彌は師匠から飲酒の戒を受けて居るからとて固辭して暇を告げて還らうとすると、その人が云ふに「日がくれてをるから是非一泊して行きなさい」と云つてその人は消えて仕舞つた。沙彌は石窟に宿つて居ると、一人の美女が飛び込んできて、沙彌を犯さうとするけれども、沙彌は仙術を求むる一念に凝つて美女から逃れて數十里も走つてくると、天童が空中から飛來して「大師は汝が戒律をよく守つてをるのを見られて汝に神藥を與へらるゝ、之を服すると汝の願は遂げられる」と云つて藥を授けた。沙彌はその藥をのむと、身が軽くなつて飄然と空を歩んで歸つた。

(4) 聖者の戒

北齊の僧明勗が文殊の居所を尋ねようと思つて笈を負うて深林幽谷を隈なく探してをると、奇怪な状態の僧に出逢うた。道連れができて三日も歩いて東臺の麓に一軒の倒れ小屋を見出した。その中にはきたない相貌の僧侶が數名居つて行儀のわるい疎野な様子をしてをるので、明勗は彼等を侮蔑しながら茅庵に宿つた。夜半に同行の奇僧が病氣になり夜中吟呻して、穢ない臭氣がしてよりつけなかつた。その病僧が明



島に「お前は先に往つてくれ、自分は病氣が重いので同行ができない」と云ふので、明島はそれを幸に思つて病人を乗せて出發し二三歩行くと、忽ち大きな音がしたので、ふりかへつて見ると、庵は跡かたもなく消失したので、明島は聖境の幻化を悟つて自分が愚であつたことを悔い、十日餘も祈願したが文殊の姿を見ることができず、自分の寺に歸つて師の僧に告げると、師僧が云ふに「汝の罪が二つある、一つは疎野な僧侶を侮蔑したさもしい心と、一つは同行の病僧を打棄て、行く無慈悲が、聖者の叢林に入りながら山岳の遠きを隔てたやうなわけである」と教へたので、明島は大願を起して終身敬心を失はなかつた。

## (5) 聖者を射る

唐の雁門の太守李靖は、不信神で傲慢無禮な男であつた。寺院を破毀したり殺生をしたり始末におへぬ男であつた。一日中臺の野に獵りに出かけて馬を乗まわして居ると、一人の僧が美婦人と一緒に池の中に浴して居るのを見るや、李靖はいま／＼しくなつて腹を立て、弓矢をとつて其僧を射た。僧が肩をぬいで居る方に矢があたつたが、射られながら飄然として東南の方へ行くので、追駈けて菩薩頂にいつて見ると、文殊と普賢の二像があつて、文殊像の肩に矢が立つて居つたので、傲慢な李靖も大に後悔して自分の無道を悟り、泣いて文殊像にお詫をして歸つた。其後は道心發起して寺の保護に盡力した。

(以上は清涼山志、五臺新志、古今圖書集成等から抄録した。まだ／＼こんな話は澤山あるが、皆佛理を高したものが多い)。

## 五臺の文藝

美術の方面では繪畫、彫刻、金石の方面では碑文、造像等があると思ふが、此處には文藝にとゞめて置く。

## (1) 文章(散文)の類では

宋の朱辨の代州清涼山記、金の元好問の兩山行記、明の王思任の遊五臺山記、明の喬宇の五臺山遊記、清の顧炎武の五臺山記(古今圖書集成)、唐文獻の五臺山獅子窟建十方院碑(五臺新志)、清の康熙帝の東臺望海寺碑文、中臺演教寺碑文、西臺法雷寺碑文、菩薩頂大文殊院碑文、射虎川臺麓寺碑文、五臺殊像寺碑文、五臺碧山寺碑文、臺麓寺碑文、重修清涼山羅睺寺碑記、五臺湧泉寺碑文、五臺山廣宗寺碑文、五臺山顯通寺碑文、五臺山棲賢寺碑文、中臺菩薩頂碑文、五臺山白雲寺碑文(清涼山志、五臺新志)。

## (2) 詩(韻文)の類

(十題詠の内) 五臺山 宋 丞相 張商英

五頂峯巖接太虛。就中偏稱道人居。毒龍池畔雲生密。猛虎崖前客到疎。氷雪滿山銀煨煉。香



花遍<sub>レ</sub>地錦鋪舒。展開坐具剛三尺。已占<sub>二</sub>山河五百餘<sub>一</sub>。

迢迢雲水陟<sub>二</sub>峰巒<sub>一</sub>。漸覺天低宇宙寬。東北分明瞻<sub>二</sub>大海<sub>一</sub>。西南綿綿望<sub>二</sub>長安<sub>一</sub>。圓光化現珠千顆。離

照初昇火一團。風雨每從<sub>二</sub>岩下<sub>一</sub>過。那羅洞裏有<sub>二</sub>龍蟠<sub>一</sub>。(東臺)

披<sub>レ</sub>雲躡<sub>レ</sub>雪上<sub>二</sub>南臺<sub>一</sub>。北望清涼眼豁開。一片烟霞籠<sub>二</sub>紫府<sub>一</sub>。萬年松徑鎖<sub>二</sub>蒼苔<sub>一</sub>。人遊<sub>二</sub>靈境<sub>一</sub>涉<sub>レ</sub>溪去。

我訪<sub>二</sub>眞容<sub>一</sub>踏<sub>レ</sub>頂來。前後三三知者少。衲僧到<sub>レ</sub>此費<sub>二</sub>徘徊<sub>一</sub>。(南臺)

寶臺高峻峙<sub>二</sub>穹蒼<sub>一</sub>。獅子遺踪八水傍。五色雲中遊<sub>二</sub>上界<sub>一</sub>。九重天外看<sub>二</sub>西方<sub>一</sub>。三時雨雪龍宮冷。一

夜風飄月桂香。土石亦堪<sub>レ</sub>消<sub>二</sub>罪障<sub>一</sub>。那非<sub>二</sub>菩薩<sub>一</sub>現<sub>二</sub>神光<sub>一</sub>。(西臺)

北臺高聳碧崔嵬。多少遊人到便回。怕<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>目前生地獄<sub>一</sub>。愁<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>耳畔活風雷<sub>一</sub>。七星夜夜通<sub>二</sub>峰頂<sub>一</sub>。

六出年年積<sub>二</sub>澗隈<sub>一</sub>。熱少寒多難<sub>二</sub>久駐<sub>一</sub>。焚脩眞令<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>灰。(北臺)

中臺炭爨最堪<sub>レ</sub>觀。八面奇峰擁<sub>二</sub>翠巒<sub>一</sub>。萬壑松濤心體靜。一天花雨骨毛寒。重重燕水東南澗。漠

漠邊塵西北寬。信入<sub>二</sub>文殊眞覺海<sub>一</sub>。大家高步白雲端。(中臺)

此詩に和して作られた詩に唐文煥以下八人の僧俗があり、其他數十人の吟詠がある(清涼山志)。

普光寺賜壁峰金禪師

明 太祖

沙門號<sub>二</sub>壁峰<sub>一</sub>。五臺山愈崇。固知<sub>二</sub>業已白<sub>一</sub>。此來石壁空。能不<sub>レ</sub>爲<sub>二</sub>禪禪<sub>一</sub>。區區幾劫功。處處食常

住。善世語<sub>二</sub>鵬鴻<sub>一</sub>。神出詣<sub>二</sub>靈鷲<sub>一</sub>。浩漭佛家風。雖<sub>二</sub>已成<sub>二</sub>正覺<sub>一</sub>。未久<sub>二</sub>天臺叢<sub>一</sub>。一朝脫<sub>レ</sub>殼去。

人言<sub>二</sub>金壁翁<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>斯新佛號<sub>一</sub>。盡水溢<sub>二</sub>蛟龍<sub>一</sub>。飛錫長空吼。隻履掛<sub>二</sub>高松<sub>一</sub>。年逾<sub>二</sub>七十歲<sub>一</sub>。元關盡  
悟終。果然忽立化。飄然凌<sub>二</sub>蒼穹<sub>一</sub>。寄與<sub>二</sub>壁峰翁<sub>一</sub>。是必留<sub>二</sub>禪宗<sub>一</sub>。(古今圖書集成)

婆羅樹歌

清 康熙帝

婆羅珍木不<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>得。此樹惟應<sub>二</sub>月中植<sub>一</sub>。想見初從<sub>二</sub>西域<sub>一</sub>移。山中有<sub>レ</sub>人多不<sub>レ</sub>識。海桐結<sub>レ</sub>藥松栝形。

千花散盡七葉青。山禽廻翔不<sub>レ</sub>敢集。虛堂落<sub>レ</sub>子風冷冷。楚州遺碑今已偃。我眉雪外雙林遠。未<sub>レ</sub>

若<sub>二</sub>鼓山近可<sub>レ</sub>遊<sub>一</sub>。靈根終古蟠<sub>二</sub>層巒<sub>一</sub>。繁陰亭午轉團圓。回<sub>レ</sub>眺精藍路幾盤。憑教<sub>二</sub>紫府仙山樹<sub>一</sub>。

寫入<sub>二</sub>被香殿裏<sub>一</sub>看。(清涼山志)

五臺山の詩は澤山あるが、此處には著名な人の作品の一二にとどめた。

(昭和三年三月)



## 大理文化の名残

大理は雲南省の一都城である。清朝の末までは三縣五州、太和縣、雲南縣、浪穹縣、趙州、鄧川州、賓川州、雲龍州、北勝州で大理府を成して居つた。此處には多くの故蹟や史料が貯へられてをる。

大昔は禹王が治水の足跡を印したと云ひ、明の楊慎の南詔野史には、大理國は十四代も續いた、唐の天寶年間の段思平（高祖聖神文武帝）から宋の哲宗の紹聖元年まで凡一百五十八年間續いたと記載してある。

雲南は支那中原から云ふと邊鄙未開國と思はれて居つたが、決して苗蠻の異窟のみではない。昔は安南、西藏方面からの交通が此山國を通じて種々な文明を持ち込んだ所で、駝背馬蹄の下にこぼれて落ちた文化の種子がかすかに根をおろして居つたに相違あるまい。飛禽の去來でさへいろ／＼な草木の花や實を交換するのにも見ても、人類の交通に種々な影響はあつたらうと思はれる。支那の中原から見れば奥の邊鄙だが、西洋方面から見れば寧ろ門口である。大理の古い文化は地からも湧いたらう。天から降つたかもしれない。名山古刹の多いのでも見逃すことのできない文化の足跡がある。

吳應杖の滇南雜記に、大理府城には古刹が多い。三塔寺（崇聖寺）が最も大、寺中には金の王庭筠（黃花老人）の絶句の碑がある。

文果の洱海叢談に、點蒼山一名は靈鷲山、梵語では香閣崙山と云ふ。蒙氏が中嶽に封じた。漢書に邪龍雲南の山は扶風、太乙の如く、上に馮河あつて周圍萬歩云々。

鄧樵の通志の大理府山川考に、「蒼山中嶽は雪山と號した。磐石の徑一丈ばかりがある。それは如來が苦行した地であつて草も石も梅檀の香氣があるので香巖と名づけた」。風景としては風花雪月の四景、即ち上關の花、下關の風、蒼山の雪、洱海の月である。今は上關の花は伐り去られたが、下關の風は九月から五月迄は盛に吹く、山も揺るがんばかりに。

陳鼎の瀛遊記に、大理府は天竺の妙香國で、初は羅刹に屬してをつた。觀音大士が中印度から來て點蒼山嶺に結跏趺坐された。その磐陀石も現存してをる。

大理は一名羊苴麻城と云ふ。城内には司馬遷（史記の著者）司馬相如（漢の文豪）の二祠がある。又諸葛武侯の紀功碑もある。

崇聖寺の三塔はそびえて、百餘支里の洱海を隔て、中塔が見える。その中塔は瓶塔で、高さ四十八丈で十六級ある。南詔の建極十三年（唐の咸通年間）に出來たもの。

弘聖寺の浮屠も三十丈、十六級である、そこに楊慎が摹刻した禹王の碑もある。

以上は大理の文化が印度の佛教美術、文學等から漸染され、名山に入り寺院を産み、あらゆる文化をも將來したものと云へよう。



### 儒學の跡

大理の儒學は漢の章帝の元和二年に建設された。幾多の消長を経て、元の至元乙酉の年に雲南の参政郝天挺によつて新修され、又明の正統年間に重修された。孔子像も安置し春秋の釋奠も引きつゞき舉行された。清朝の康熙二十二年にも修理された。

蒼山書院、明の弘治年間に設立したが、今はない。

源泉書院と桂林書院は、明の嘉靖年間に立てられたが今は亡びた。清の康熙年間に義學を立て學問を奨励した。其他、太和縣の儒學、趙州の儒學、鄧川州の儒學、賓川州、雲龍州、雲南縣等、いづれも學府を設けて學教を奨励したので、邊鄙に拘らず當時の文化は今日に比して旺盛な日があつた。雲南は學者も出た。大理は其影響を受けてゐるので、文獻も少なくない。現存してゐる古碑の類もみるべきものがある。

### 大理の金石

#### 崇聖寺梵鐘

款識、「維建極十三年歲次壬辰四月庚子朔十四日癸丑建立」

南詔國建極十三年は唐の懿宗の咸通十三年にあたる。鐘をめぐる波羅蜜像も興味深い美術である（續

雲南通志）。

#### 撫運碑

大理府の五華樓前にある。鄭買嗣が建てたのを後高氏輔政碑に改刻した（明一統志）。

#### 咬淵碑

水目寺前の古碑で、僧咬淵が字を刻つたと云はれてゐる。天開十六年（宋の嘉定十三年）楚州の趙佑の撰文竝に書である（徐霞客遊記）。

#### 玉泉碑

宋の楊庭撰文、宋の理宗の寶祐元年（元の憲宗三年）趙州城北十五支里の處にある。宋の理宗の時太弟が高泰祥と戦ひ敗れて喉が渴いて、天に祈つて清泉が湧出したと云ふ碑文である（續宏簡錄）。

#### 大理先師廟碑

太和縣にある。元の至元の初、雲南省の参政郝天挺が學宮に建てた（明一統志）。

#### 重修崇聖寺碑

太和縣城の西北に在る。元の李源道の撰文（大理府志）。

#### 圓濟蘭若陰碑

天歷二年己巳七月既望、比丘普瑞の撰文、圓護書（滇南古金石錄）。



増建大圓濟宮碑

至順三年辛未正月十九日、趙良の撰文、圓護書（同上）。

玉手碑

佛都の二大字、崇聖寺に在る。

崇聖寺の僧念庵が證道歌を書いて石に刻したが、其右手の腕から掌まで瑩明玉のやうであつたので玉

手碑と稱する（李元陽の崇聖寺重器可寶者記）。

大理八蜡廟碑

明の李元陽の撰文。

黃花老人詩石刻

金の王庭筠の自作の詩を自書したのである。それを明の李中谿が石に刻した（續雲南通志）。

大理に關係ある文藝

王庭筠石刻詩

王母祠東古佛堂。相傳棟宇自隋唐。年深寺廢無人住。滿谷西風栗葉黃。

千桂一條青竹杖。興來日挂百錢遊。夕陽欲下山更好。深谷無人不可留。

常道名山護此邦。千家落落嶺西窓。山人乞與山前地。鶴托先開二十雙。  
挂鏡臺西挂玉龍。半山飛雪舞天風。寒雪欲上三千尺。人道高歡避暑宮。

此外に大理の光彩を放つた文章としては

元、李源道の 重修崇聖寺碑文

同、郭松年の 大理行記

同、虞集の 大理事略序

明、楊慎の 遊點蒼山記

同、范言の 點蒼山神祠記

同、黃琮の 修建五華書院記

同、李元陽の 花甸記

同、楊師孔の 溫泉遊記

以上は大理を敘述した名文の主なるものである。此外に詩も澤山あつて大理を高調してをる。

物産の一部

宋史大理傳に、宋の熙寧九年、犀皮甲を貢獻した。大理國は甲冑の細工が最も精巧である。或は象皮で



胸背をつくる。その大片は龜甲の如く、その堅さは鐵のやうである。

宋史大理傳に、南詔の貢物に、刀、銅鼓、箎笙、口琴等がある。

點蒼石（大理石）は點蒼山から出る。白質に黒文の山水草木の狀あり、人々はそれをみがいて屏を作る（漢  
鑿）。

大理石が廣く内外に珍玩されてをることは贅述を要しないが、かゝる天然美術が大理の文化を長い間培養し發育させたことは疑ひない。

茶は大理の誇りである。明一統志に感通寺の茶が特に香味に秀でて居ると出てをる。

紙、大理の紙は昔は書籍に用ひて四川紙の如く堅韌なものであつた。

墨、安徽に劣らぬ佳品が出来る。

硃砂、大理産の硃は文人墨客に珍重された繪の具であつた（雲南通志）。

以上は直接に間接に大理の文化を涵養して來た天然物である。大理と云へば今日ではいかにも古來未開の蠻國として一顧を與へないが、素より交通不便で山路の險阻を跋涉せねばならないので、遊意を鈍らす人が多いのである。しかしその景致は奇抜、山谿は深邃であり、古來の神祕を藏して特種な文化の香を残し、儒佛兩方面に於て、印度その他の外國關係に於ても大理は見逃すことの出きない興味をそゝる別天地である。

雲南に關する文獻は甚だ多いが、中にも雲南叢書千餘卷四百冊に種々の資料が含まれてをる。

（昭和三年十月）



### 雲南苗族の風俗一斑

古來、支那に九種の民族があつた。諸夏系、東夷系、巴蜀系、東胡系、閩粵系、北狄系、羌系、西藏系、苗蠻系である。雲南に散在してをるのは苗蠻系である。黃帝時代の昔には文明な民族であつたらしい。春秋時代には湖南、廣西、雲南、貴州に散在し、支那國境外では安南、暹羅、緬甸地方に及んで居つた。後世漢民族が旺盛になつてからは、彼等は特殊部落となつて、容易に漢民族と同化しなかつた。今も猶雲南に最も多く存在して新文明と全然同化し得ない該民族が九十餘の細別に及ぶ。人類學や考古學等の範圍を侵さぬつもりで、其風俗の一斑を左の參考書より簡單に抄述する。

- |        |         |
|--------|---------|
| 溪蠻叢笑   | 宋 朱 輔   |
| 西南夷風土記 | 明 朱 孟 震 |
| 滇 記    | 明 楊 慎   |
| 夷 俗 記  | 明 蕭 大亨  |
| 苗 俗 記  | 清 田 雯   |
| 洱海叢談   | 釋 阿 撥   |

- |        |       |
|--------|-------|
| 滇南新記   | 張 泓   |
| 蠻司合志   | 毛 奇 齡 |
| 南土司婚禮記 | 陳 鼎   |
| 滇遊記    | 陳 鼎   |
| 南蠻志    |       |
| 續雲南通志  |       |
| 永昌土司論  | 劉 彬   |
| 銅谿織志   | 陸 次 雲 |
| 獠 獠 傳  | 諸 匡 鼎 |
| 苗俗紀聞   | 方 亨 成 |
| 苗 俗 記  | 貝 青 喬 |
| 苗 民 考  | 龔 榮   |
| 苗疆村寨考  | 嚴 如 燧 |
| 苗疆風俗考  | 同 上   |
| 平 苗 記  | 劉 應 中 |
| 苗 防 論  | 魏 源   |
| 西南夷改流記 | 魏 源   |



邊省苗蠻事宜

藍鼎元

雲南遊紀

民國謝彬

彬

右の参考書中の一般的のものは一々出典を挙げないが、特殊なものは出處を挙げて置く。

苗族の信仰は甚だ幼稚であるが、道教や佛教や喇嘛教に多く歸依してをる。一般に龍樹と云ふ木を崇拜し、其下に聚まつて福を祈る。滇南新語には、山神、土地神の名稱が出てをる。それには男巫と女巫が神事を掌る。之を巫教と呼んでをる。

男巫を白馬又は邦馬と云ひ、橋祭り、覺生魂（病人が危篤に陥つた時魂を引留める神事）を掌る。女巫は師娘と呼び、遊仙園（正月に一家の吉凶を卜する）、墓地調べ、占鬼（死靈を招く）陰氣除け等を掌る。

苗族の占法に四種ある。

- (1) 撈油鍋 盜犯を判定するため村人會議をして、油を入れた鍋を烈火の上にかけて沸騰する時、微細な金屬を其の中に投込んで、其の一家のものを呼び出し、其の一人に熱油に手を突入れて中の金屬を取出させる。もし其の人が手を入れないか又は手を入れても取り出せないものを盜犯と認定する。
- (2) 漂燈草 犯人偵察のため、燈草（藺）二莖を三寸程に切つたものを斜に十字に組んで水面に浮かし、其の水の周圍に村人を聚めて、年長者が口で燈草を吹いて搖がす。搖れが止つて燈草の一端が指した方に居つたものが犯人ときまる。

(3) 牛角卦 一村や一家の吉凶を判断するために、一本の角を兩面に削つて、一方を陽、他方を陰として、それを地に投げる。其の面の向きかたによつて判断する。

(4) 牛豚雞 一村の收穫の豊凶を卜する時、村人が會食する。其の食物中の雞の下顎から、三又形の軟骨を切り出して見て、其の骨尖の屈伸によつて判断する。

苗族の會盟と刑罰

村民大集會を牛豚と稱し、毎年の定日には各々酒や米や薪や羊、牛など一品づつ持ち寄つて宴を開き、村の規約を議決する。又重罪者を處刑する時も牛豚を開いて、處刑する。重罪犯は「五牛分屍」と云ふ牛裂きの刑に處し、其の次は火で焼き殺す。又他の部落から凌辱された時は、村内決議の上で復仇する。斯くの如くして永遠に雙方から復仇を繰返して争鬭の絶えまがない。

土司の女子

土司と云ふのは蠻族の酋長が世襲して居るので、封建時代の世襲大名の如く各々配下を統治してをる。其の女子は腰までの上衣に長い多くの襪をとつた裙をはく。富者の女は五重も穿く。貧者でも二重か三重をかさねる。處女の間は其の裙を寝る時も脱がない。そして沐浴をしない。お嫁に行くとき始めて一浴する。既に嫁入りすると毎日一浴して蘇合油を塗る。懷妊すると正装しても端坐せず、立つたり偃臥したり自由にしてをる。酒や刺戟性のものを食はぬ（土司婚禮記）。



桃太郎式傳説

貴州境の古郎と云ふ處に昔一人の婦が洗濯をして居るとき一節の竹が流れて來た。其の竹の中に人の泣聲がするので拾ひあげて割つてみると、立派な男の赤坊が出て來た。其の子が成長するにつれてすばらしい豪傑になつて雄勢を振つて大將となつた。竹から生れたので竹王と稱した。婦が拾うて割つた竹が野に棄てゝあつたものから根が生えて竹林となつた。此地方の苗族は竹王の後裔だと云つて居る(嶺南雜志)。

苗族の種類と風俗 (排列の順序は南蠻志及び雲南遊記を參照した)

〔土 猿〕(二名土老 烏蠻の一種)

所在地 建水、潞江、廣西、廣南、文山、昭通

信仰 巫教

風俗 男は青軟で首を包み、麻布を着てをる。竹籠に酒や食物を入れ、それを背負うて市中に賣る。婦女は高髻を結び、紅縫花布を着て、よく勞働をする。子を産むと赤坊を水にほうり込んで沈むものは打棄つて育てない。浮んだのを養育する。そして太鼓を鳴らしてお祭をする、之を逐福と云ふ。

猿人は夜は夫婦同宿しないが、晴天の眞晝に夫婦手を取つて山に入つて楽しむ。其の路の入口には松や竹を挿して人が往來できぬやうにする。それを「挿青」と云ふ。それを見た人は其處を避けて行く。若し誤つて其の中に入り込んだら、刀や斧で斬り殺される。

父母が死ぬると親戚が集つて笑ひ叫んで歌舞をする。之を「鬧屍」又は「唱齋」と云ふ。次年の春、杜鵑の聲を聞く頃に皆が哭きさけんで「鳥は一年経つと又來るのにお父(母)さんは返つてこない」と口々に叫ぶ。

〔花 猿〕

所在地 同前、信仰 同前

風習 男子は青藍の衣服を好み、婦女は花繡の短褌を着る。婚禮には婿の方から親迎の禮は行はない。女家から婿家へ酒肴を運んで其の家の祖先を祭る。

一般の習慣として、正月から二月迄は大鼓を鳴らして舞跳する。之を「小過年」と云ふ。

〔白土猿〕

所在地 阿迷、蒙自

信仰 佛教、言語は支那語

風俗 一般に狡詐である。農業を好み、水に近い處に住居して水田を耕す。陰曆十月を歲首(正月)としてをる。

〔黒土猿〕

所在地 文山、廣南、馬關等

雲南苗族の風俗一斑



信仰 巫教、支那語を用ふる

風俗 男子は青衣、女子は短衣の狭窄なのを着て下に青裾を穿いてをる。水田の耕作をつとめる。葬式の際は、其の家の女婿が死人の前で笙を吹いて舞ふ。

〔飛頭猴〕 (一名尾致魚)

所在地 墨江の臘白果

風俗 額に縷のやうな痕があり、眼に瞳子がない。夜中人家に飛込んで幼児や鶏卵を食ふ。

〔土人〕

所在地 武定地方

信仰 佛教

風俗 男子は袈裟(綿入れ)を着て皮の繩を腰に束ね、それに弓や銃を繋いでをる。女は羊皮や毡を被る。婚姻の結納品には牛羊、刀、甲等を贈る。平素は耕作や狩獵を業とし或は城内に行つて物々交換をする。

〔怒人〕

所在地 維西の外邊、環江から麗江に多い。

信仰 佛教

風俗 男子は紅藤を編んで鉢巻にし、髪は繩で束ねて七八寸もまき立てゝ居る。麻布の短衣に紅白の袴をはいて跣足でをる。婦女は髪に布を結んでをる。平素は篋を負ひ囊を持つて黄連(藥)を採りにゆく。耕作もする。男女十歳以上は皆面に龍鳳の刺青をする。蟲や鼠を食物にする。

〔怒子〕 (一名野夷)

所在地 怒江、康普、葉枝、阿墩

風俗 竹垣をした竹屋に住居し、鳥獸を捕獲して副食にする。鹽はない。馬も驢も持たない。平穩な境遇で、盗人も居らず、夜、戸閉りするのは虎豹を防ぐためである。竹細工に巧みで紅文の麻布を織る。此民族は怯懦であつて獐々族の侵略を恐れてをる。

〔扯蘇〕 (雲蠻の一種)

所在地 楚雄、普洱

風俗 強悍である。山嶺岩石の間に板屋を構へてをる。男は髪を束ね短い羊皮を着て山地に耕作する。婦女は短衣に長裙を穿き跣足でをる。糸をつむぐ。

〔車蘇〕 (雲蠻の一種)

所在地 楚雄、建水

風俗 陶瓦の製法を知らず、木片で屋を覆うてをる。山地を耕して蕎麥を作る。皮の履をはき布の



衣物をきる。用器は木製で錫の飾がしてある。

〔山蘇〕 (雲蠻の一種)

所在地 臨安府、馬關、蠻耗

信仰 佛教

風俗 深山に潜居し、木片で家を建て、竹器を製造して、城内に持つて行つて米と交換する。弩で鳥を射、それを炙つて食ふ。男は被髪で跣足、女は髪を頭にかぶせてをる。婚嫁には媒人がない。夜は柴を燻にたいて其周圍に男女が臥る。

〔儂人〕 (邇東の黒苗の一派)

所在地 廣南、廣西、建水、文山

風俗

男子は面が小さく白く目は黒い。青藍布で頭を纏ひ、白短布で脛をまいて青衣を着てをる。婦女は髪を束ねて布で頭を包み、短衣に長裙をはき、刺繡した靴を穿き、路を歩く時は體を揺がして行くのを美觀としてをる。一般に樓上の住居を好む。坐臥ともに床榻を用ひない。性强悍にして闘を好む。外出する時は鏢や弩の類を携帯する。染物が上手である。それを「儂人青」と稱する。

〔沙人〕 (安南土酋沙氏の後裔と自稱してをる)

所在地 廣南、廣西、曲靖、建水、文山、普梅、西澗

信仰 佛教

風俗 高山深林の中に居る。寢室には衾も枕もない。牛皮の中に坐つて火を擁して夜を明かす。耕作、漁獵で生活し、出入には必ず刀弩を携へる。狡悍である。男女の服装は儂人と同じであるが、多く上衣をきない。

〔種家〕 (一名仲家、沙人の一派)

所在地 廣西州其の他

信仰 巫教

風俗 男は青藍の衣を着て、頭に青帕をかぶり跣足でをる。女は髪を束ね髻をさす。帕を敲き刺繡の裙を着る。一般に淫卑にして劫掠を好む。父母が死ぬると肉食をせず、祭に供へた肉は棄てるか人に與へるかする。婚葬ともに牛を禮物にする。病氣をしても藥を吞まぬ。一般に卜鬼と云ふ占をする習慣があり、卦書がある。彼等が使用する器具は皆木製である。官吏が山寨に入込むのを嫌つて、飲食物に毒を仕込んで殺すことがある。

〔黒沙人〕

所在地 舊富州

信仰 喇嘛教



風俗 溪河の傍に散在して木片で屋を建てて居る。男女とも耕作する。殺伐を好む。黒沙の別派があるが更に暴戾貪慾である。深山や水邊で耕作をする。

〔白沙人〕

所在地 同前

信仰 同前

風俗 頑愚で猜疑が深い。男女とも暇があれば河に漁りにゆく。耕作もする。賣買もする。衣服は白を好む。火葬を常とする。

〔麼些蠻〕

所在地 麗江、鶴慶

信仰 巫教

風俗 一般に純朴である。男子は蓬髪して毡帽をかぶり、大領の布衣を着て羊皮を羽織つてをる。新しい教育を受けた者は殆んど漢民族と同じ。夜冠を用ふる。婦女は高髻に漆髻を戴き、耳に大きな環をさげ、短衣長裙をきてをる。平生勤勞してをる。一般に正月五日は山に登り神を祭る。

〔標々〕（生熟二種あり、標類とも云ふ）

所在地 舊姚安、大理、永昌

風俗 熟苗は樹の中や岩穴に住居し諸處に移住する。男は頭を包んで麻布をきて毡衫を被り、短刀や弩を携帯してをる。婦女は短衣長裙を着、跣足で、竹筐を負うて耕作にゆく。永昌土司論に據ると、雲南の蠻族は永昌に最も多くの種類が居る。漢民族の被害も多いが、地方官が蠻族から賄賂をせしめ、徹底的に討伐をしないので益々猖獗する。

生苗も衣食の状態は前者と同様である。但し城内に入らず、支那語をつかはす、婚嫁は尊卑同族の差別がない。死ぬると火で焚いて骨は拋棄する。

〔古宗〕（西番の別種で吐蕃の後裔）

所在地 舊鶴慶、麗江、景東

信仰 喇嘛教

風俗 男は紅纓の黄皮帽をかぶり、耳に銀環をつけ、花褐をきて刀を佩び囊をさげ、皮靴を穿いてをる。婦女は辮髪で、珊瑚や銀の玉を飾つて五彩の布衣裙をきて、花褐を背に被り革の靴を穿く。

牛羊を牧し青稞を種えて生活し、多少禮儀作法も知つて居る。一般に身體は偉大である。

此一派に小古宗と云ふのがある。女は短衣を腰にまとい、麻布裙をはいてをる。麻布を織つたり、草木の葉で棚を編んだりする。定住はしないが、雜穀を種えたりして、一般に山芋や野菜を食料としてをる。獵が好きで酒を嗜む。人が死ぬると上から土をかけて置く。祭祀することを知らない。



【野古宗】

所在地 舊沅州及び沅江

信仰 喇嘛教

風俗 容貌深黒。岩石や礫邊に住み、麋鹿に伍して住家を持たない。

【西番】 (一名巴苴、雲南の西北徼外の夷)

所在地 舊永北、麗江

信仰 喇嘛教

風俗 男子は辮髪で黒の皮帽をかぶり、麻布短衣をきて毡單を被り、漆布で左肘を纏ひ跣足で刀を佩び、竹を切り出して生活をしてをる。男は辮髪で瑪瑙や礪磧(寶石の一種)をかけ、婦女は麻衣や毡被を着、膝の下まである裙を穿き跣足でをる。

【野西番】

所在地 舊永北

信仰 同前

風俗 髪を垂れ、鼯鼠(毛織物)を着し、一定の住處なく麥を種え牛を飼ふ。西番とは異つてをる。

【甘人】 (藤英の別派)

所在地 舊東川地方

風俗 勤惰で耕作をつとめ、教令を遵奉してをる。此一派に孟人と云ふのがある。風俗は甘人と大

差がない。

【喇魯】 (一名喇烏)

所在地 舊永昌

風俗 水の附近に樓居し、其の下に牛羊を畜へ、農業をつとめ、人に對して謙讓である。邊僻の地に散在し、蜂や蛇を食うてをる。

【苗人】 (盤瓠の一種)

所在地 曲靖、東川、昭通

信仰 巫教

風俗 男子は青布で頭を包み、短衣で跣足、狡猾で怯懦、耕作を勤む。

女子は髪を束ねて五彩の花冠を戴き耳に銀環をさげ、紫布の短衣に花繡の布裙をはく。苗錦と云ふ織物をして竹筐に入れて市中に賣りにゆく。節期には銅鼓を鳴らし角笛を吹いて神に詣る。此種族は自稱して「毛」と云ふ。漢民族の方では「苗人」と呼ぶ。迤西の苗人は迤東の苗人に比較して清潔を好み溫和で聰明である。



〔沙 免〕

所在地 各地  
信仰 巫教

風俗 男は髪を剪つて眉まで垂れ、衣物は膝の上迄着てをる。女は髪を束ねて平頂冠を戴く。農作の暇には山寨から一二里も外に出て、笙を吹き女をつれて来て各々處を隔て、坐り、歌をうたひ雙方から唱和する。一人が笙を吹いて先導すると多くの男女が其の間を舞跳してまはる。之を「跳月」と稱する。此際男女の情意投合したのが父母に告げて牛や羊を結納として結婚する。

死人は棺に入れて中堂（座敷）に置き親戚や友人が祭典をする。富者はそれ／＼答禮の品を贈るが貧者は酒食を饗する。死者の子は白布を帯にし、妻は衣物を易へるのを禮としてをる。

〔黑乾夷〕

所在地 宣威

風俗 男子は髪を捲きたて、麻布を頭に纏ひ、耳に大きな銅圈をはめて肩に垂れ、麻布の短衣をきて跣足である。女は頭巾のやうなものをかぶり毛褐に細帯をしめてをる。深山の竹林に住居し、婚姻には媒人を用ひないで、男は笙を吹き女は口琴（鐵製の樂器）で唱和する。其の調子が合うた時に夫婦の約束をして父母に告げると、初めて媒酌が立つて迎へる。葬は野邊で火葬をする。

〔狛 人〕（貴州の狛家苗と同族）

所在地 曲靖、昭通

風俗 男は纏頭短衣跣足、女は青布で額を包む。僧侶の帽子のやうな恰好である。貝殻を飾にし耳に大環をはめ、花布で縁をつけた裙を穿いてをる。富者は珠を綴り、白布で脛をまき纏足して靴をはく。一般に粗朴で犬や鼠を愛喚する。

〔苦 葱〕（雲蠻の一種）

所在地 臨安、元江、鎮沅、普洱

信仰 巫教

風俗 男子は髪を結び藍布を頭にまき、青布短衣を着て跣足でをる。婦女は短衣に長裙をつけ、竹籠を負うて山に藥を探りに行く。十二月二十四日を歳首とし、羊豚を煮て祖先を祭り、酔うて歌舞する。

〔喇 烏〕

所在地 臨安、景東

信仰 巫教

風俗 男女とも亂髮跣足、面色黒く身體短小である。婚約をする時は先づ禮銀數兩と耕牛一頭を結納とする。父母兄弟の喪には角笛を吹いて舞跳し牛を供へる。



【麥岔蠻】(爨蠻の別種)

所在地 舊武定府

風俗 男は披髪で短衣、跣足、米糧を負うて城内に賣る。女は男の裝飾と殆ど同じ。妻を娶る時は牝牛の結納をする。笙を吹き酒を飲んで祝ひ、木で人形を雕んで祖先を祀る。

【羅緬】

所在地 祿勸縣

風俗 山地に耕作し、薪を採り菌をとつて鹽米に換へる。短袴をはき半身は裸である。特殊の土語を語る。

【媯且蠻】

所在地 姚安

風俗 男女とも頭を纏ひ、麻布を着て羊皮を被り跣足でをる。酒が好きで歌をうたふ。男は笙を吹き女は篋琴を弾く。常に酒を携へて山に入り終日歸ることを忘れてをる。

【爨 喇】(阿猫に類し猴羅の形狀に似てをる)

所在地 永昌、騰越の境

風俗 兇悍で鬪を好む。婦女は錦布を斜に腰にまとふ。此族は移動常なく糧食の蓄へがない。

【利米蠻】(蒲蠻に類す)

所在地 順寧の山林

信仰 巫教

風俗 男は竹で縁をとつた帽子をかぶり麻布の短衣を着てをる。女は青布で頭をまき跣足でをる。男女とも酒好きである。牛羊を愛飼する。婚喪の禮は漢民族と同じ。

秋の收穫がすむと牲を供へて土神を祭り笙を吹いて歌ひ舞ふ。之を祭莊家と云ふ。

【小列密】

所在地 雲州

風俗 木細工や土器を造る。射獵が巧みで雀や鼠を射つて炙て食ふ。

【排 人】

所在地 瀾滄江外の鶴慶、麗江

風俗 男は披髪で麻布短衣跣足、婦女は麻布を着、耳に大銅環をさげてをる。彼等は柔情で岩谷に居つて木の葉を被り、鳥獸の肉や血を食物にしてをる。

【披 夷】

所在地 不定



信仰 佛教

風俗 隨時に移動するので家に蓄積がない。但し山糧を種ゑ牛羊奴僕を持つて居るものが十中の七で、水田を耕すものが十中の三である。彼等の家を訪問すると宴樂をして款待する。

〔披沙夷〕 (蠻蠻の遺種)

所在地 東川、巧家

風俗 身長高く面色黒く力がつよく跣足で善く走る。其の敏捷さは猿のやうである。髪を髻にして銅の簪をさし、毡裘で半身を包んでをる。隨處に草屋を構へて蕎麥を種ゑ、食糧にする。

〔喇毛〕 (喫人、麼些に類する)

所在地 瀾江邊

風俗 白帽白衣をきてをる。頗る柔懦である。

〔子間〕

所在地 舊雲南府

信仰 佛教

風俗 平時は薪賣りが仕事である。嫁入りには必ず馬に乗つてゆく。其の他漢民族と大差なし。

〔猓卜〕

所在地 同前

信仰 巫教

風俗 農業を勤め、田祖神を祭り、蝗螟を紙袋に入れ子供に持たせて境外に放つ。

〔瀾摩〕

所在地 舊楚雄

風俗 從順でよく麻を種ゑ、麻布を織つて賣る。

〔蒙化夷〕 (保羅に類す)

所在地 順寧府、雲州

信仰 巫教

風俗 毎年除夜から六日前の日に酒肴を設けて松明をたき、歌舞して來年の疫病驅除の祭をする。

〔猓人〕 (盤瓠の後裔で沙人族と共に湖南から流入した)

所在地 雲南と廣西の境

風俗 耕作をする。減多に城内に入らない。男女とも讀書をする。性質は兇悍で眼が光り瘳猛な容貌をしてをる。深山に居つて虎豹を捕へる。衣服は紅いものが好き、婚姻には媒人が立つ。葬式は火葬してそれを收めて居る。淫を好まず争訟をせず、一箇處に四五年居ると必ず他處へ遷住する。毒藥を製する



ことが上手で、漢民族と交通しない。弩に毒矢を備へて防衛してをる。「滇遊記」に彼等は象を戦闘に用ひ、毒矢を射つて敵を仆すことが載せてある。

〔聶素〕

所在地 永平

風俗 服食等は猓羅に似てをる。書を読み耕作をする。女は糸をつむぎ貿易もする。性情は男女とも醇良である。

〔馬喇〕

所在地 王弄山、壘山

信仰 喇嘛教

風俗 男子は紅と白の格子縞の衣服をつけ、女子は白衣を着て雞の羽を髪に挿す。

〔阿成〕

所在地 王弄山、壘山

風俗 怯懦で質朴で暇あれば魚を調し鳥を弋る。田野の仕事の歸途には必ず薪を負うて来る。婦女は銀飾をつけない。婚嫁の時は牛を聘物に用ひ羊酒を婚禮の酒に用ふる。瓢に水を汲んで来て花嫁の足にかける。此禮を「壓性」と稱する。

〔阿憂〕

所在地 不定

風俗 頑固である。耕作をする。死ぬると山寨中の老幼が集り屍の前で舞跳する。一般に火葬を用ひる。忌服はない。此族は多淫である。毎年春期に男女が日を定めて舞跳し、其處で夫婦になる。婦女は各々錦の袋を背負うて身を離さないが、嫁入りして始めて其の袋を解く。

〔阿繫〕

所在地 不定

風俗 男女とも跣足で頭は包んでをる。婚禮には財物を用ひず、婿が親迎する時は薪を背負うて女の家にゆく。其の薪は多くて重い程がよいので婿殿の資格に合格する。花嫁は嫁入りして米を搗く。それは多くつく程が花嫁の價値をます。葬式は棺を用ひず火葬したのを埋める。

〔普岔〕

所在地 文山の東安里と安南境

風俗 男は髪を結び、衣服は膝まで届かない。女は五彩の衣服を地に一寸許り引ずつてをる。多く自由結婚である。客をする時は必ず大鼓や銅鑼を鳴らし角笛を吹いて歌ふ。喪葬には木槽に屍を入れ馬に乗せてゆく。喪主は白服を着て雞を抱いてついてゆく。親類達は哨哨(樂器)を吹いて送り、石洞に槽を藏



めて置き一年餘りして後、埋葬する。

〔喇溪〕 (交趾から流入したもの)

所在地 各地の深山に散在する。

風俗 深山僻地に居つて耕作する。煮たものを食ふ。男は闊袖を着、髪は後に垂れてをる。女は五彩の毛織で衣物をつくり頭からかぶる。婚姻には媒酌無し。葬は火葬である。平素白蟲を嗜食する。

〔孟鳥〕 (孟獲の子孫と自稱してをる)

所在地 深山僻地

風俗 男は藍布を着て帯をしない。女は短衣青裙を用ひ頭に青布をまく。四角な頭巾のやうである。其の頂に銀製の飾をつける。

〔普鬮〕

所在地 諸處に散在する。

風俗 男は青布で長領の短衣を着る。夏も冬も布を被つてをる。女は桶裙をはき、全身に紅緑の珠をかけてをる。親が死ぬると嗣子や女婿が跳舞し、親戚が大鼓をうち銅鑼を鳴らし角笛を吹いて祭る、之を娛屍と云ふ。

〔普馬〕

所在地 諸處に散在する。

風俗 婚姻の禮物に金錢を用ひる。死ぬると屋下の人通りの多い處に埋めて其の上から毎日湯をかける。屍が腐敗するのを待つて肉は別の處に埋め、骨は洗ひ清めて緞子の袋に入れておく。家内の人々は紅緑の衣物を着て、豚や牛を殺して婦に背負はせて舞跳させる。三年後に本葬をする。家内のものが病氣すると、其の骨を出して舞跳する。病氣するのは埋葬骨がたゝると思つてをる。

〔普列〕

所在地 文山、東安里

信仰 佛教

風俗 髪を束ねて結び、粗布の衣服を着て長い袴を穿く。漢民族は其の衣袴を襦袴と云ふ。種蒔をする時は牛を牽いて來て豚の頭を供へて土神を祭る。婚姻には媒人を用ひる。死ぬると火葬する。此族は身體が長大で鼻が突出して居る。皮膚は黄黒色で印度人に似てをる。

〔腊欲〕

風俗 男は青藍の衣を着、女は白衣を着る。婚葬ともに質素を尙ぶ。婚禮には必ず羊酒を用ひ、女とも馬を並べてゆく。特に婚姻には儀式を重んじる。

〔腊歌〕



風俗 婚姻に媒酌なし。貧富とも婚禮銀は六兩と定めてある。此定額を贈られないと結婚は成立しない。死者は臥棺に入れて葬むる。彼等は木の葉で冠を造つてかぶる。衣服は青藍をよるこぶ。定住なく散在する。

〔白腊雞〕

所在地 文山地方

風俗 色が黒く性質は愚鈍である。緑色の衣服を着、男女とも耕作や牧畜を営める。蟲や蛇を食ふ。

〔交人〕

所在地 文山、安南界

風俗 男は髪を垂らし、短衣を着て箬笠や芭蕉扇を用ひる。女は紅い服を好み、首に帕をかぶる。書を読み作法も知つてをる。

〔海夷〕

所在地 不定

風俗 他の苗族と大差なし。

〔魚兀〕

所在地 廣西州地方

風俗 勞役に耐へ、山地に蕎麥を種ゑ、牛馬を牧する。山に入つて藥を掘り、蕨や筍を食ふ。

阿西

所在地 同前

風俗 山間の凹地に住居してよく働く。其の住居が水に遠い處では、女が水汲の役をし、又糸をつむぐ。

〔卡情〕

所在地 舊元江府地方

信仰 喇嘛教

風俗 愚鈍である。歌舞を好む。婚姻には媒酌が立つ。結納の多いのは百金もかゝる。一度に納めきれないのは子や孫の代になつて追納するのである。一般に女兒の産れるのを悦ぶ。男兒を産むのは罪科と心得てをる。葬式は火葬。

〔黒濮〕

所在地 景谷、寧洱

風俗 色が黒い。男女とも跣足で沐浴を好まない。髪を薙いで辮髪にしてをる。婚禮には牛や銀塊を贈物にする。喪服は白衣、葬式がすむと白衣を脱ぐ。死體は木槽に入れてをく。



〔龍人〕

所在地 寧洱

信仰 佛教

風俗 耕織を勤む。正月元日には必ず千秋戯と云ふ芝居をする。

〔阿卡〕

所在地 同前

風俗 頑愚で容貌は醜い。男女とも青藍布を着て紅藤を腰に繋ぐ。耕作の餘暇は獵をする。

〔長頭髮〕

所在地 同前

風俗 莽猛である。亂髮で身體に刺青をしてをる。

〔峩昌〕(一名阿昌)

所在地 大理、永昌

信仰 巫教

風俗 男女とも竹笠をかむり、熊皮を飾りにする。野猪の牙を簪にし、又雉の尾を挿し麻布を着る。刀弩の類を携へてをる。客を饗するには必ず犬を料理する。父兄が死ぬると母や嫂を妻にする。或時

百夫の長某が死んで其の寡婦が年わかしくして節操をたて通して餓死してから、母嫂を妻にする不倫の陋俗がやんだ。

〔縹人〕(一名縹、白苗の一種)

所在地 永昌、普洱

信仰 佛教

風俗 男子は髪を束ねて冠をかぶる。芝居の王様の金冠のやうである。青藍の短衣に袴をはき毡片を被つてをる。女は高髻である。白布を着て珠を綴つた裙をはいてをる。一般に佛教を信じ、耕織をつとめ、一梭を織るたびに念佛を唱へる。又竹筐を負うて城内に商賣にゆく。極めて正直で約束が堅く、代價の不拂や借越をしない。

〔哈喇〕(古喇種)

所在地 哈喇山

風俗 男女とも色が黒い。顔を洗つたり髪を梳ることを知らない。男は花布の上着を着、女は紅衣を尙ぶ。黒藤をくるくると腰にまいてをる。子を産むと竹籠に入れて背負うてをる。

〔結萱〕

所在地 不定



風俗 象牙の大環を耳尖にかけて頬に垂れてをる。紅毛布の一丈許なので頭を包んで後に垂らして半身衫をきて右の肩をあらはしてをる。

〔遮些〕

所在地 孟養

風俗 男女ともに髪を束ね耳環をはめてをる。華彩がすきで、衣物は體に締めつけてをる。飲食物は清潔を好む。弓を射ることが巧妙である。

〔羯些子〕

所在地 騰衝

風俗 耳に大環をはめ、一幅の布で腰から下を蔽うてをる。米も肉も煮ずに生食する。槍刀を上手に使ひ、勇敢である。戦ふ時の喊聲は犬の吠聲のやうである。

〔地羊鬼〕

所在地 同前

信仰 巫教

風俗 短髪で黃眸、狡黠で利を嗜む。出沒自在で他人に仇をする。妖術を行ふ。蟲類を食物に入れて食ふ。

〔卡鬼〕 (一名卡利瓦、生熟二種あり)

所在地 永宋東南、辣蒜江、普洱

風俗 生苗の方は掠奪などやるが、熟苗は勞役に服し一般に愚蒙である。男は青藍布を着て短褲を穿いてをる。女は青藍布の短衣に裙をはく。耕作の外は獵をする。

〔野蠻〕

所在地 金寶城の北大股

風俗 家をもたず夜は樹の上に宿る。赤髮黃眼である。樹の皮や獸の毛で臍から下を蔽ひ、手に骨の圈を持ち、雞の羽をさして紅藤を纏ひ、鈎や大刀を持つて鳥獸を捕へて生食する。殊に蛇や鼠を嗜食する。高い處や險阻なところをゆくのが飛ぶやうである。人に逢ふと殺して仕舞ふ。

〔三撮毛〕 (黒裸の別派)

所在地 思茅

風俗 男は麻布短衣に袴をはく。女も同じく袴をはく。男は紅藤を腰や手足にまとひ、男は耕作をする。女は力役もする。男女とも兇暴である。

〔那馬〕 (蠻人の一種)

所在地 洱源、弓籠



信仰 喇嘛教

風俗 子を産んだ女が連れ子して嫁入りするのを歓迎する。三人も四人もの連れ子をする婦人を男は貴ぶ。人妻になつて更に他の男に親近することは許されない。もし我が子の嫁が他の男と關係を生じても其の父母姑は見ぬふりをしてをるが、婿の兄が知つたら姦夫を殺す。

従兄弟姉妹とは結婚する習慣である。人が死ぬると棺を用ひず、死體を寢臺に置いて死者の衣冠を陳列し、其の家の人々は哭きつゞける。親戚は百歩の外で哭き、友人は五十歩の外で哭く。そして酒を携へて來て死者の口に入れては跳踊しつゞ哭いて拜する。隣の人々に酒食を振舞ふ。死後五日たつてから、昇き出して焼き骨を埋めて墓を立てる。毎歳忌日には祭をする。忌服の禮は嚴重である。喪中は一切裝飾を廢する。家の年長者は白い衣冠を用ふる。

〔花苗〕(苗族の一種)

所在地 迤東、金沙

信仰 巫教

風俗 黒白の格子縞の衣服を喜ぶ。臺灣の蕃人に似てをる。

〔老蘇〕(一名伊盤、蒙古人と苗族の雜種)

所在地 昭通、巧家、迤東、迤西

信仰 佛教、巫教

風俗 蒙古語と土語とを混用す。迤東地方では雄勢である。他の苗族を壓倒してをる。漢民族とは交通しない。他の種族とも同化しない。黒、白、紅の老蘇と阿甲子の四類がある。黒老蘇は勢力があり富んでをる。白老蘇は最も賤弱で黒老蘇に使役されてをる。紅老蘇は耕作をせず、年中山に入つて鐵を打つてをる。阿甲子は竹籐を編んで生活をし漢民族と接近してをる。清潔にすることを知らぬ。彼等の一部は鴉片を吸ふ。

〔末索人〕

所在地 麗江附近

風俗 毡帽をかぶり、衣服は頗る長い。秋冬の間は毡を着て頸から膝までくるんでをる。

〔名家〕

所在地 迤西、麗江

風俗 漢人と接近し、風俗も大部分漢民族に同化してをる。婦女は方巾を戴き、短衣短袖下袴をあらはし短褲を穿いてをる。之を圍腰と云ふ。冬は肩から毛皮を着てをる。

〔猓々〕(一名羅々。猓虎、黒白二種あり。「滇南新語」には大猓猓と出てをる)。

所在地 迤西、迤南



風俗 迤西に居る男子は尖毡帽をかぶり、冬は毡子を被る。既婚者は髪を束ね、粗大な牛の角のやうな形の黒方巾をかぶる。平時は短衣を着て漢民族と大差ない。婦女は方巾をかぶり其の四端を垂れてをる。衣服は圓筒の如く膝迄の長さである。紅線布を用ひる。足は鮮紅色の布でまとふ。迤西の婦女は格子の花布裙をはき、上衣は體を締め頭は衣布で包んでをる。性質は男女とも溫和で、支那語を解する。溪蠻叢笑に「白銀で造つた鳥獸の形の酒器を用ひる。人妻は十五六歳になると耳に筒環をはめる。右の上齒を抜いて竹筒に入れてをる」とあり。

〔四外人〕

所在地 迤西の邊境

風俗 體をまとひ、身體は矮小で醜貌である。頭髮は頭巾の外に出てをる。

〔水獺夷〕

所在地 普洱、車里

風俗 衣服は寛濶で花布を用ひ、婦女は頭に簪をはめ、皮膚は白く沐浴を好む。富者は浴後に蘇合油を塗る。貧乏人は羊の脂をぬる。

「丢包」と云ふ遊戯がある。彩線で毬をつくつて歓迎する人に投げつける。又「倒水」と云ふものもある。毎年二三月頃女子は田の中で秧を植ゑて歌をうたうてをる中を男が通ると、女は皆竹の筒に水を汲んで

で男に打ちかける。男の衣服がびしよぬれになると皆が丁寧に慰安する。此遊戯を一名「粵南馬」とも云ふ。

〔旱獺夷〕

所在地 蒙自地方に多い。

風俗 麻布の服を尙ふ。女は髪に大櫛をさす。上衣は短くて狭い。路を歩きながら麻を績いで歌ふ。山に居るのを旱獺夷と云ひ、水邊に居るのを水獺夷と云ふ。山に居るのが兇暴である。

〔觀音普拉〕

所在地 同前

風俗 婦女は高髻で頂に頭巾のやうなものを冠る。其の姿が觀音大士のやうだと云ふ。貧乏人は年中薪や柴を賣りにゆく。富人は寛濶な衣服を着て襟の前後に銀鎖をかけ耳に大きな銅の鈴をさけてをる。

〔野人〕

所在地 雲南の西邊に多い。

風俗 野蠻で殺伐を好む。平時は上體を赤くそめて、雞毛を髪にさしてをる。漢民族と全然交通しない。

〔蠻子〕



所在地 老撾地

風俗 腰から上に一條の布をまき袴をはかない。山間を走るのが飛ぶやうに輕捷である。漢民族を見ると殺してしまふ。但し其中には開化したものもあつて漢民族と交はる。

〔牛尾普拉〕

所在地 廣南、文山、馬關

風俗 男は粗末な麻布を着、女は布で髪を束ね、牛の尾の如くして二つの環にして頭をまはしてをる。薪を賣つて生活する。

(昭和三年六月八月)

### 新疆風俗

新疆は漢民族、滿洲族、蒙古族、甘回族、繡回族、布魯族、塔奇克族、老矣夷族等々、此外八九種の小族があるが、小族に關係する文獻は得られない。

上記の各族が占住するので、其の宗教と習俗が一致しない。新疆に關する載籍は可なり豊富であるが、茲には比較的新しいもの、新疆圖志、新疆識略、新疆禮俗志、西遊日記、新疆紀遊等を獵涉し又新疆の人に聞いて簡單に敘した。清末から民國にかけ新疆問題は討議されてゐるが實行に移されたのは餘り顯著でない。時の政府は其の統治にいつも手を焚いてゐる。幾多の地下資源は蘇聯の壟斷に一任して指をくはへ傍觀してゐる。

漢民族にとつては邊陲の地で生活に不便多く一消一長を免れない。同治年間左宗棠が平定して、其の同郷の湖南人が入り込んだ。其の殘部が開墾等に居残り一時は小湖南の名があつたが、其の後減少した。現在漢民族は僅か十數萬と稱せられてゐる。漢民族や滿洲族の風習は吾人には珍らしくないから省略する。蒙古族も同様であるが、新疆内の蒙古は多少蒙古原地の風習と異なる所もあるさうで、新疆の一民族として加へた。



## 蒙古族

新疆の蒙古族は清朝乾隆時代に張家口方面から移住して、焉耆、伊犁、烏蘇、塔城、阿爾泰古城等に分布され、水草を追うて定住はしない。冬暖く夏涼しく冬窩夏窩と呼ばれる。其の居住状態は蒙古に往つた人には珍らしくなからうが、他の民俗と對照するために左に略述する。

居處は氈房といひ、釜をふせた形で、大は周圍十餘丈、小は三四丈、昔は穹廡と稱する今の包である。窓はないが頂上に四角な穴をあけ、晝開き夜閉ぢる。上下共に白氈で蔽ひ、門簾も氈である。房内は門に當る處を上位とし右側に佛を祀り、其の下に家具を入れ、其の下方が客室、其の下に牛羊を繋ぐ。左側に主人の臥床があり帳で蔽はれ、其の下が炊事場である。寝るには床があるが又地に席を敷いて臥るのもあり、人畜一室に同棲する。富人は炊事場と家畜は別部屋がある。婢女は同房に寝ない。婦女は朝起きて氈窓を開け、水を甕に汲込んでから家人を呼び起すと、各々水壺を提げて洗面する。洗面盥はない。茶に牛乳や鹽をまぜて先づ佛に供へてから、一家揃つて茶を飲み、餅々(マンジュウ)を食うて後、男女各自の仕事にかゝる。日暮、牛羊が歸つて來ると、婦女は壺を持つて乳を搾る。晩食は麵をとる。就寝するに燭を用ひないで、竈の火が熄へると眠る。一般食物は牛羊肉、茶、牛乳が主なる食物である。バター、酒、乳餅、乳皮が牛乳から造られる。

衣服は青色を好む。男衣は長袍に「背心」(チョッキの如きもの)を着る。冬は羊の毛皮の外套に貂皮の帽子を用ゐる。女衣は布袍で裳が地を曳く。氈帽の頂に紅絨を結んでゐる。耳環、腕環、指環は多く金銀、珊瑚、珠玉を用ふ。

童子の顔に痘(ニキビ)が出ると成人したことになり、結婚問題が出る。病氣の時は喇嘛を招いて讀經する。藥効がない時は耳に一つ孔をあけて金糸を通して珊瑚を一粒さげる。快復生長する意味である。

婚禮は男の方から、羊、酒、哈達(布或は綾に佛像のあるもの)を結納にする。女の方で承諾すると、媒人が新郎をつれて女家に赴く。哈達に膠を包んで持つてゆく。膠が縁を堅めるといふ意味である。女家では結納品の羊、酒、布帛等を親戚や友人に分贈して婿定めしたことを知らせる。

新郎は女家へ赴いて親迎する。新郎が到着すると喇嘛が門で讀經する。新郎は跪いて禮拜してから舅姑に面會し新婦をつれて歸る。新婦は紅帽を冠り朱袍を着、布で面を蔽ひ馬に乗せられると、樂隊が先導する。新郎の門に來ると喇嘛が讀經する。新夫婦は天地及び佛に跪拜する。嫂が新郎新婦の髪を拆けて交代に梳る。これは結髮の意味である。門に入ると先づ竈神を拜し次に舅姑を拜する。嫂は新婦をつれて氈房に入り新婦に着替をさせて辨髮を二條に編んで胸の左右にさげる。嫂がつれて又竈神と舅姑とを拜し、次に親戚朋友の來賓を拜して房内に歸り牀に坐らせて帳を垂れる。來賓は紅布、飴、菓物等を祝物として贈り、圍坐して茶や酒を飲んで祝詞を述べる。來賓の男女は舞跳する。一方では奏樂する。三日間は何事も



嫂が指導するが、三日過ぎると新婦は仕事をす。一般に男女は二重に妻を娶ることは許されない。男女とも年頃になつて結婚のできない事情が上司の耳に入ると、結婚を助けてやる。

貴人の葬式は、死體に湯浴させ白布で包み、高原に昇いでゆくと喇嘛が讀經して焚く。骨まで焚け盡すと亡者に罪障がなく極樂にゆけるといつて祝ふ。焚灰と土を合せて土偶を造つて地中に埋葬する。普通平民は常服で死體を包み、喇嘛が讀經してから擇らんだ荒野の地に棄て鳥獸に食はせる。死體の傍らに松明を立て、送葬者は馬を馳せ後を振り向かずに向ふ。鳥獸が死體を食ひ盡すと亡者は天堂に昇つたと祝ふ。三日間に食つてゐないと亡者の罪障が消滅しないと一家大騒して恐懼し、又喇嘛に讀經させ鳥獸を驅り集めて早く食はせる。之を天葬と稱する。其の葬式が終ると亡者の住んだ處は不吉な處だつたと云つて他所に移住する。其時も喇嘛が讀經する。死者の所有品は家畜まで其の半分を喇嘛に提供するので、葬式のあつる毎に喇嘛は富裕になる。

子は父母の喪に、妻は夫の喪に、百日の忌に服する。普通、平民は四十九日の喪に服する。忌中は素服(白)を着て髪に櫛を入れない。宴會や娛樂は避ける。忌明になつて外出する。親が死んでも廟祭はないが命日には佛前で焼香し酒を供へて禮拜する。子孫は節句々々に喇嘛を墓地に招いて讀經させて追哭する。天葬者は室内で讀經し空を仰いで哭する。漢民族の如き系圖も宗法もない。曾祖父以上は稱呼がない。子は父の業を繼ぐ。子のない者は兄弟の子を養嗣にする。兄弟に子がない時は近い親族の子を入れるが、異

族の子は入れない。

尊長者は幼者に接吻する。幼者は尊長者に對して膝を屈して拜する。客が來ると其の馬蹄の音のする方に主人は走つて行つて馬の手綱を執つて馬から降ろす。男は西、女は東へ門簾を開け、客を佛壇の下に坐らせ食物をすゝめる。知らぬ人も款待して泊らせる。貴人や長官が來ると一家に福が來るといつて鄭重に待遇する。羊を屠つて饗應する。其の時は羊を客に見せ客がうなづく、其の羊を屠り羊頭羊尾を佛に供へ肉は客に饗する。貴人が來ると近鄰から酒肉を贈つて祝ふ。

男子が喇嘛になりたい時は、一家の諒解を得て八旗軍の副隊長の認可證を受け、寺に入る。後日父母を奉養する事情で還俗することは許される。

毎年四五月の頃「鄂博」といふ石を三四尺の高さに積んだ圓形の塔を祀る。少年子弟は競馬をする。優勝者には賞品を授ける。春秋の佳日に喇嘛は佛を輿に乗せて練り歩く。家々から哈達を獻納して道の兩側に跪拜する。其の日は茶は飲むが一切の殺生を禁じ、蟲一疋殺さぬ。之を犯したものは天の怒にふれて佛は福を授けないといふ。

## 甘 回 族

新疆の回回教徒は甘肅から來てゐるのが多いので甘回といふ。全數四十萬を突破してゐる。彼等は清真



寺を建てゝゐる。大抵商と農で朝早くから日暮まで働くので、生計に餘裕があり、人の厄介になることを恥とする。

男子は十二歳、女子は九歳を出幼といひ、師を招いて經文を誦し禮拜の儀式を教へる。婚姻は家長の主持により、婚禮は雙方の握手を以て定婚の證據とする。新郎は騎馬で女家へ親迎する。新婦は嫁入りして三日目から炊事其の他の家務に服する。一ヶ月経つて里歸りをする。其の時は寺の掌教者に告げてゆく。決して自分勝手に里歸りはしない。

死ぬると讀經(コウラン經)をして、死者の衣物を換へて別牀に遷し、白衾で覆ひ雞鳴時に浴牀を設け、衾を撤して死衣を取除け、死體を浴池に遷し、布で下體を蔽ひ、香を焼き、瓶に清水を入れて水浴みさせ香屑を振りかけて襪衣を敷いて包み、棺はなく其の儘地中に埋葬する。それから三日間家人は白い喪服をつける。

甘回は新舊二派に別れ、沙溝門のは馬元章の教派が多い。光緒年間に馬善人が新派を開いた。焉耆、烏什の一帶は新教派である。其他は舊教派である。新舊兩派は折々衝突する。

## 纏回 族

纏回は新疆の土着民で全省人口の百分の七十を占めてゐる。彼等の頭に白布を纏うてゐるので、漢民族

は纏頭と呼んでゐる。彼等自身は「穆士滿」又は「畏吾兒」<sup>ウヤール</sup>と稱する。省政府は「維吾爾」と改稱させた。土耳其族で鼻が高く目が窪んで髭鬚が多い。毛髪と眼睛は黒い。

房舎は漢民族と大差ないが屋蓋が平面で少し傾斜し、其の上を歩いたり坐臥もする。雞犬も登り薪や糧食も積まれる。屋頂に天窗をあけて空氣を通す。室は入口が一で多く北向きである。壁に穴をあけて爐となし烟突は屋頂に出してゐる。室内は氈毯を敷き其の上に坐臥する。几や榻はなく小圓卓を食卓にする。四方の壁を穿つて衣類器具を納め、屋頂には板を嵌めて彩色を施し、壁には人物や花卉の繪飾があつて清潔美麗を觀ふ。富家や貴人は別に客室があり母屋と隔離してゐる。家の周圍に泉水や園林があり、避暑や遊覽に適する。

男の外衣は洋服の外套の如く、それを袷袷といふ。綿布で其の上に帶をしめる。絨質に花を刺繡した小帽を四季冠り通してゐる。女服は洋服に似て長襦が膝に垂れてゐる。紅緑の彩を愛し毛羽の飾を喜ぶ。耳環、腕環、指環を用ゐる。外出には布で面を蔽うて人に見えぬやうにする。男女とも革履をはく。其の長さは膝に達し上に套鞋(オーウァーシュー)を穿く。室に入る時は戶外で套鞋を脱ぐ。食物は麥麵、粟、餅粟が主で米は従である。普通食物は炒つたり焼いたりする。貧民は乾した物を食ひ冷水を呑む。米飯を食ふ時は羊肉を細かくきり雞卵を入れて鍋で炒り、鹽、胡椒、葱、人参等を入れる。大皿に盛り手づかみで食ふ。之を怕老といふ。漢民族はそれを抓飯と稱する。これは纏回族の上食である。客を款待する時は



羊肉牛が主で、それも詰いたのが最上で煮たのは次である。彼等は鷹、鹿、犬、蛇、蟹は絶対に食はない。これは回教の教律である。

男兒は四五歳で割禮を施して大祝をする。女子は早熟早衰である。男は十七八歳で結婚する。婚禮には新郎が親迎し新婦は顔を包んで馬に騎り、鼓吹樂が先導し夫家に着くと讀經禮拜して常服に着換へる。

離婚の場合、子があれば男兒は夫に女兒は妻に屬する。離れて一年内に生れた子は前夫が認知する。離れて六ヶ月たつと再婚してもよい。一度結婚した女が再度前夫の許に歸る時は、他の人と一度結婚してから再歸する。回教は男子の多妻を許すが、男一人で四人以上の妻を持つことは禁じてある。

葬式には阿訇(僧)が讀經し即日白布で死體を纏ひ、木匣に入れ錦で蔽ひ、四角な穴を深さ一丈許り掘つて、死體を匣から出し、二人がかりで繩をかけて吊りおろして土をかける。其の墳を麻札と呼ぶ。春秋に祭る。死者の財産は其の男の子に屬する。女子と前妻の子は其の半分を受けける。男子がない時は女子につく。子女共がない時は、死者の兄弟や親戚に均分される。子が父母に先だつて死亡すると祖父母の遺産は孫には移らない。

此の民族は名はあるが姓はない。父母、祖父母、兄弟、夫婦以外の伯父叔父舅姉は皆兄と呼び、甥姪姪は弟と呼ぶ。其の他の尊卑長幼は一概に其の名を呼び合ふ。彼等は他の回教徒と同じく、天帝を眞主として教祖マホメットを眞主の命令を傳達する使者として尊崇する。

## 哈薩克族

哈薩克族は、新疆北地の康居族(今の露國)である。色が黒く蒙古人のやうである。宗教は回教徒の純正さはない。阿爾泰、塔城、伊犁の北境に散布し、城郭も居處もなく、水草を追うて遊牧し、氣候によつて包を移す。食物は燻肉や燻肉を好み、馬腸が最上食品である。其の製法は三四歳の馬を屠つて、肉を細切りし藥味を加へて腸につめ、其の兩端を縛つて火に燻す。燃料は羊糞である。牛乳入りの茶を好み、馬乳で酒を造る。衣服は黒色を尙び年中帽子を冠り、腰に皮帶をしめ、左に皮囊をさげ、右に小刀を佩びてゐる。女服は長くして地を曳き、寶石の腕輪や指環をよるこぶ。男兒は五六歳で割禮を施し騎馬を教へる。十歳位になると手綱さばきが巧妙になり奔馬の背で舞踊をする。年少の時から鬚を剃らぬので毛むじやらであるが、唇鬚は剃り落して飲食に邪魔にならぬやうにしてゐる。

婚姻は同胞と結ぶことを嚴禁してゐる。媒人が女家に結納を持參し、女家の家長が媒人と握手するのが定婚の證據になる。新婦は嫁入りしても舅姑と面會せず、往き會うても背を向けて手帕で面を掩ふ。二三年してから初めて舅姑と對面する。例によつて男は四人以上の妻を娶ることができない。嫡妻が家政の主權を執り諸妾は協同して作業する。離婚の際は親戚友人が雙方の曲直を裁斷する。夫の方から離婚を要求する時は女に資財を與へる。女の方から要求した時には何も與へない。子供ができておればそれは夫に屬



する。或は夫が死亡して他に再嫁せんとする時は異族に嫁するを許さず、前夫の兄弟に嫁する。これは彼等の教規である。

葬式には讀經はするが忌服はない。祭もせずたゞ哀哭するだけで死體は土葬する。頭は北に足は南に面は西に向けて其の上に土を積んで墓をつくり、讀經がすむと會葬者は引上げる。夫が死ぬると妻は爪で顔を掻きむしり血を流して悲しむのが禮である。それをしないと皆から薄情だと輕蔑される。

哈薩克族は素朴である。來客を厚遇する。尊長者は幼者に接吻する。對等の相手とは握手して腰をかきめる。貴賓を迎へると羊や馬を外に繋いで客に見せてから屠つて馳走する。馬は青か白を貴び、羊は黃首白身を上品とする。食事の時は手を洗ひ帽子を冠る。もし帽子を忘れた時は草の莖を一本髪に挿して敬意を缺かぬやうにする。食物は指でつまみ肉は所持の小刀で切る。

早起して洗面をし下體を浴して身を清め、一日五六回讀經する。遊牧者は寺院がないので西に向つて禮拜する。途中で水があれば水浴をするが、水がない時は清潔な土を以て代用する。

纏回と同じく齋戒して終り跳舞する。刁羊戲といふのを演ずる。少年が騎馬で驅馳して羊の取りあひをする。勝つた方は其の肉塊を攫んで友人達へ分與すると皆で祝賀する。

此の族も家系なく宗法もない。祖父以上の稱呼がない。犯罪者は衆議で決し、輕罪は家畜飼育の勞役に服させ、重罪者は死刑に處して其の財産を分け取りする。

## 布魯特族

布魯特族は纏回の一種で、一名を吉爾吉思(Kirghiz)と呼ぶ。俗間では黑黑攷と云ふ。喀什に集り東西二部に分れ、東部は天山の北に居る(漢代の烏孫)。西部は天山の南に居り(漢の休屠、捐毒、唐の李歸、西域記の鉢露)、喀什噶爾、英吉沙爾、蒲犁、葉城、烏什等に散布して遊牧してゐる。喇嘛教を奉ぜず、狡獪で利を喜び、掠略を屢々して政府を手古摺らせてゐた。牧畜はするが耕作はしない。言語は哈薩克族と略同じいが、纏回とは文字を異にしてゐる。其の牧地は蒲犁から烏什まで人口二十餘萬と稱す。居室は穹廡で蒙古包と同じく、服飾は纏回と大同小異、病氣の時は毛拉といふ祈禱師を招いて祓をする。羊を病人の前で屠り大鼓を叩いて舞跳し、病魔が羊に乗り移つて滅ぶといふのである。

婚禮は纏回と殆ど同じ、少し異なるのは、新婦が新郎の門を入ると新郎と對坐して鹽水に浸した餅を食ふ。これは合巻の意である。一夫多妻で嫡庶の別なく、妻は終生一夫を守る。夫婦喧嘩の時は阿訇が讀經して調停する。夫が死亡すると妻は再婚ができるが、夫の兄弟に嫁する。兄弟がない時は異族に適する。女の所有物は亡夫の家で買収し一物も持ち出させない。それは自家の所有權が異族に移らぬためである。父母が死すると素服を着て墓參をする。一週年の後、忌明の宴會をする。親戚友人は牛羊を贈物する。刁羊戲もする。又高竿を立て、的にして鐵砲で射的をする。此の族は豚を食はず酒を飲まぬのは、回教の



教戒を遵守してゐるからである。

### 塔吉克族

塔吉克族は突厥種である。蒲犁、依耐、西夜、烏托等に散布し、漢代の葱嶺八國、唐の盤陀で、宋代では大食に隸屬した。印度への通路で唐の玄奘が佛經を印度に取りに往つた歸路である。此の族は回教信徒で遊牧もし耕作もする。布魯特族に似てゐる。

### 老朶夷族

老朶夷は蒙古種である。成吉思汗が西征した時、中央亞細亞や西部歐洲に散落して同族集居し、漸次回教に歸依して喇嘛教を棄てたので、喇嘛側から老朶夷(狗)と罵稱してゐる。露國では韃靼と呼んだ。成吉思汗の勢力が西歐に侵入して、韃靼が露國に居残り白人と結婚した混血種である。皮膚は白く鼻高く眼は窪んでゐるが頭髮と眸子は黒い。露西亞種は二百餘萬人も居る。彼等は新疆に來て商業を営み、籍は露西亞に置いてゐたが、露西亞革命後中國に歸化して、塔城、伊犁、迪化、喀什一帶に居る。多くは商人で、中には官吏にもなつてゐる。敏捷で勤勉で儉約である。音楽が上手で樂器は中國と西洋を參酌して別調をなしてゐる。飲食起居は西洋風で生活ものび／＼して、譯回や哈薩克を凌駕してゐる。豚と食はず

烟草を喫せず、回教の教規を守つてゐるが、近來蘇聯に舊習を打破されつゝある。

(昭和十六年五月)



## 秘密結社哥老會の史的斷片と傳習

南支一帶に於て牢乎として抜くべからざる秘密結社が揚子江沿岸に跋扈してをる。それを哥老會と稱する。其の會の中にはいろいろの分派がある。私は清朝末期から革命後民國五六年頃迄、湖南省を中心として見たり聞いたりしたところの斷片を非系統的に追敘してみる。

名稱と發端 支那の文獻としては清稗類抄や秘密結社史等があるが大同小異の記述である。哥老會一名哥弟會は清朝から滅された明朝の遺民や退伍兵士などの不平分子が集結したので清初乾隆時代に具體化したものである。同治年間に長髮賊討伐の退伍兵士の失職したのが哥老會に加入したので、會の勢力が膨脹して來た。

此會の中に紅帶と云ふ一派があつて、賭博劫盜をやる。此の賭博班を文差事と稱し、劫盜を武差事と呼ぶ。此等を洪帶とも云ふ。哥老會の正派である。會員は自稱して在元弟兄と云つてをる。又梁山英雄とも自稱する。又青帶と云ふ分派もある（青帶の事は橋樑氏が詳敘して居られるので蛇足を添へない）。

山西方面で澤州府の哥老會は特別の稱呼があつて會員の秩序階級を立て、をる。左の如くである。

老大、老二、老三、老四、老五、老六、老七、老八、又は八旗杆、二十四個大鞭子、七十三個黑包巾、

三十六個大粗腿、應天大王、天大王等の稱がある。

十戒 忤逆戒、強姦戒、盜戒（自己の私利のため竊盜する）、賊戒、扒灰戒（會の秘密をもらす）、喫水放水戒、酗酒滋事戒、殺人戒、放火戒、罵天地戒、兄弟不和戒。以上の戒を犯したるものは、湖南方面で死刑又は嚴罰に處した。

黑帶白帶 の二派が青紅二帶以外にある。黑帶は竊盜、白帶は拐騙を業とする。哥老會の支配は受けてをるが正會員からは劣等視されてをる。彼等の行動が卑劣であるからである。彼等黒白二帶が稼いだ獲物は、哥老會に幾分の納税をせねばならぬ。之に違背すると死刑に處せられる。

三合會 湖南と接壤の江西、廣江、廣東方面には三合會がある。哥老會と姉妹關係をなしてをる。會員中には巨萬の富や堂々たる位地を占めて居るのが少くない。哥老會と行動を共にしてをる。湖南の哥老會員が江西や廣西に行くと三合會員となつて働く。三合會員も亦同様である。

哥老會の活動 光緒十九年、湖南の醴陵で官憲が哥老會退治をやつて、二人は殺され二人は監禁されたのを會員は大奮闘をして獄舎から奪回したことがあつた。

光緒二十五年頃、革命の先驅者畢永年、林述唐等は湖南に入り込んで哥老會頭目李雲彪等を孫文に結びつけて揚子江沿岸に事を挙げようとして英雄會を組織した。

光緒二十六年義和團事件の時、同仇會の馬福益と革命志士の唐才常等と湖南に事を挙げようとして總督



張之洞に知られて唐才常は死刑となつた。馬福益は逃げ延びた。

光緒三十年、馬福益と黃興と提携して廣西省に入り込み、革命同志等と三合會中の青帮紅帮と結託して總會を組織し華興會と命名した。段々と土匪が進化して革命志士と手をとつて革命當時は哥老會の勢力が旺盛になり且つ向上して來た。

從來の哥老會は排外熱を鼓吹し注入されて宣教師や教會堂を荒らし、例の教案問題を惹起して時の政府を困らせたが、黃興等が革命事業に利用して排外思想を一轉して滿洲政府打破に方向をかへさせた。而して革命が一段落を告げると哥老會は邪魔物視せられ、飛鳥盡きて良弓藏まるの觀をなして哥老會も還元しかけてきた。

怪傑徐寶山 徐州に頑張つて各省の哥老會其の他の重鎮であつた徐寶山は鹽梟と呼ばれ、徐淮地方の製鹽を私販して巨萬の富をなし、一時は百萬の兵力を擁して革命黨に引きつけられて袁世凱の懐柔に應ぜず、遂に袁世凱の刺客が骨董屋に化けて徐寶山の家に入り込み、骨董箱の中に爆弾を仕組んで徐が其の蓋を開かんとするところを斃した。當時は今の張作霖以上の實力があつた。湖南省の哥老會は密接なる徐寶山の援を失つたので一時は力を落した。

浙江省の分會 處州の王金寶の下に雙龍會があり、衢州の劉家福の下に九龍會、浦江の杜勇は千人會を率ひ、嚴州の濮振聲は白布會を組織し、紹興の竺紹康は平洋黨を、嵊縣の裴文高は烏帶會を率ひて居つ

た。此の外に百子會、白旗會、紅旗會、黑旗會、八旗會等の小分會があり皆宣教師の横暴に反抗的態度をとつた。此處も革命派の人士が割り込んで清朝撲滅の氣勢を煽り、陶成章、沈英、張恭等が杭州會議を開き、浙江、福建、江蘇、江西、安徽五省の頭目を招集し龍華會を組織して大同團をつくり、湖南、湖北、廣西、廣東方面と呼應した。以上は哥老會が清末から民國初期に於ける變遷である。

山堂 哥老會の集團を山堂と稱する。佛寺が山號を有すると同じやりかたである。例へば水滸傳の梁山、忠義堂と稱する類である。而して道教と佛教を半々にまねた儀式を持つてをる。山號の例を擧げよう。

甘肅省の虎形山、山海關の寶華山、西涼山、湖南省の錦華山、金龍山、泰華山、楚金山、金鳳山、天臺山、四川省の峨眉山等、廣東省の天寶山等、江蘇省の東梁山等、浙江省の終南山、飛虎山、萬雲山等。此等は哥老會集團の山堂である。

會員の名稱と階級 左記は湖南方面のもので時の政府の官名を模倣してをる。

正龍頭 (總正龍頭大爺と呼ぶ)

副龍頭 (副龍頭大爺)

坐堂 (坐堂大爺)

盟證 (盟證大爺)

陪堂 (陪堂大爺)



理堂（理堂東閣大爺）  
刑堂（刑堂西閣大爺）  
執堂（執堂尙書大爺）

以上は哥老會の内閣大臣で、内八堂と呼ぶ。

香長

心腹（京内軍師或は老二と稱す）

聖賢（京外軍師或は老二と稱す）

堂家（京外總督糧餉、或は行帖、老三、老四とも云ふ）

紅旗（紅旗督糧臺、或は藍旗傳報山堂、又は黑旗伺候坐堂、又は老五とも云ふ）

巡風（巡營查哨、或は老六、老七とも云ふ）

此の外に大九、小九、總公、大公、小公、大滿、小滿等がある。此等は普通會員の稱で、之を外八堂と呼ぶ。

開山式と崇拜の標的　開山式は必ず深山古廟の人跡稀なる所で吉日を選んで舉行する。中央の正面に壇を設けて其の上に五組、關羽（或處では岳飛も祀る）の神位を祭つて彼等崇拜の標的として居る。そして紅紙に書いた進山東と出山東と云ふものを置いてゐる。進山東は天地神祇に告げる誓文である。

その文章は四六體の聯文で書かれ、それには會員の等級及び種々の條例も附記してある。出山東は天下の各山に通告する檄文である。

會員が開山式に皆集つて來た時、正龍頭は祭壇に向つて進山東と出山東を朗讀する。それが終ると一同神前に禮拜する。そして抖海式といふものを執行する。一同は誠意をこめて起誓をする。（又刑罰を行ふ時の式も抖海式と云ふ）

入會式　新に哥老會員となるものがある時、入會式を行ふ。其場所は必ず清淨な古廟を擇ぶ。入會者は必ず會員の紹介者があつて身元を保證する。紹介者の事を四盟兄中の成兄と云ふ。一名保舉とも云ふ。保舉は入會者の身元を精査して後日間違が起らぬやうにする。身元の曖昧な者、及び床屋（剃頭）、輿夫、俳優等は入會を許さぬ。會員は部分けしてあるので、新入者は其の部の一つに屬すると師弟の關係をなして長幼の序を立て尊卑を定める。甲師、乙師、丙師、丁師等の秩序があつて互に隱語を使用して親和する。入會式の會場は開山式と同じく按排されて、保舉は新入者を管事（司會者）に紹介する。管事は部下の頭目一名に命じて保舉及び新入者をつれて式場に入ると抖海式を行ふ。先づ成兄と邦兄が禮を執行する。それが終ると新入會者は神前に跪く。管事と入會者の間に左の如き問答が行はれる。

管事「汝は何をしに來たか」

入會者「貴會に入會のため」



管事「汝は誰の紹介で来たか」

入會者「某氏の紹介で」

管事は紹介人に向つて汝が紹介したかと問ふ。紹介者は「然り」と答へる。管事は更に入會者に問ふ。

管事「汝は本會の禮を知つて居るか」

入會者「成兄、邦兄がたの教へに従ひます」

管事「汝は何のために入會するか」

入會者「忠義のために」

管事「入會後鞭子（時の官憲を指す）に知られた時は汝を殺すぞ。又我會の條規を犯した時は汝を殺すぞ」

入會者「自分が機密を洩し外間に覺知された時は決して會内の兄弟に累を及ぼさず、自ら責に任じ又會規を犯し官憲に内通したり會の禮に背くことあれば、三刀五斧の刑を甘受します」

右の約束が型（型）の如く終ると管事は神壇の左側に立つて、利刀を手にして白雄雞を斬り「此の雞の如くならん」と唱へて其の雞を牲に供へ、蠟燭に火をつけ香を焚く。

そして五色の絲で一束の線香をしぼり、それを眞二つに切り「此線香の如くならん」と唱ふ。

此の誓式が了ると、再び禮拜起立して抖腕式（搦手禮に似たもの）を行ふ。

管事は入會者の名を會員證に記入する。其の會員證を寶と云ふ。其の寶を頭目に渡す。頭目は恭しく兩手で寶を捧げて、聲高らかに「大哥命我解寶來」と叫び、其の寶を入會者に渡す。入會者は兩手で受けて口の中で「多謝某哥來解寶」と唱へる。

そこで入會金一百八文を納めて、會員の諸兄弟と見知り（見知り）の挨拶をして互に賀辭を交換する。初めから此までの式はいかにも嚴峻な莊重な且つ眞剣なもので他の社會に見られないものである。

一度入會したら會員は兄弟になる。互に患難相救ふ。一人の會員が他の地方に旅行する時は、旅費を準備しないでも、行先の頭目に謁見（頭目に面會すること）を拜碼頭と云ふの禮を了ると、其の頭目が旅費を給して宿送りをする。又仕事を求める者には就職の周旋をして呉れる。

老龍頭が正龍頭に行き遇うた時は雙手を舉げて拇指を搖がして禮をする。副龍頭に遇うた時は一手を舉げる。大哥に逢ふと左手を右腕の上に加へる。其の手が肘に至るものと手が胸に至るのがある。それは相手の大哥より位地の卑い者である。最下級のものには手を垂れて體を少々縮める。途中其の他で行き逢へば舉手の禮をするのは哥老會員たる證據になる。此の舉手の相圖は官憲に知られたので其の後は他の方法を用ひてをる。

會の事業　と云へば掠奪等である。老龍頭が兵を派し將を遣はす時は關事に熟練な隊長を任命する。そして要處々々に出動する。此の隊長のことを提口袋と呼ぶ。命令の出處と云ふ意味である。隊伍の事務



を執るには内管事と外管事とが居る。内管事は隊内部の事務を處理し賞罰を掌る。外管事は敵の偵察を掌る。最も重きを偵察に置き掠奪すべき旅客が何の地方を何日の行程で通過するといふことや、其の行李の輕重及び内容まで偵察を遂げて提口袋に報告する。

出陣の誓 口袋(隊長)は内管事に出發期日を命じ出陣の誓をする。衆員は環によつて席に就くと一人に杯一つを持たせる。管事は宣誓を了ると、雄雞を割き其の血を各の杯中に滴らすと、一同は「運命」と叫ぶ。そして酒宴を張つて首途を祝する。それが終ると各豫定地へ向ふのである。

水筒の代りに水砂糖を一人に半片宛給與する。各一塊を含んで戰鬪をしたり、駈足したりするので喉渴を止めるためである。敵の追撃に逢うて退却する時は上手な射手數十名を殿隊として退却する。又先鋒が進出する時は途上に目標となる葉を置いて聯絡を保つ。大部隊の行動する時は幾萬金の獲物があるから百金千金と云ふ小金には目をくれない。

因に哥老會の勢力地帯に住居してゐる官紳人や外國人の支那僮僕中には必ず一人か二人の哥老會員が配置されてをる。如何に之を防いでも、全然根絶することはできない。富豪や其の他が大金を携へて旅程に上る場合は、其の日程から所持品まで内偵することが容易であるから、彼等の作業は百發百中である。

秘密書 哥老會には秘密書と云ふのが備へてある。それには、會員間の用語や秘密儀のことを書いてゐる。左に大略を記す。

拜碼頭、梁山高大典交結、洪盛股出身交結、贊酒、送寶、出山訪友交結、四十八句總詩交結、送行文結、三把半香、出門交結、店主回、洗面(一名開光、陪掌傳令、五牌高升、山崗令、大小通用、贊刀斬牲、祭旗、洋煙開火、祭紅旗、傳令開山  
 等である。またく澤山ある。此は文字通りの意味に解されて居らず、いろく外の意義で用ひてある。  
 暗號 會員相互に暗號を用ひる。その暗號は折々改正する。嘗て使用されたもので左の如きものがあつた。

圈子(會員のこと)	玄在(同上)	新在玄(新會員)
開山(集會)	請包袱(祕密儀式の問答)	寶(會員證)
金不換(秘密書)	海底(同上)	馬子(外人)
貴四哥(同上)	刀滑馬子(同上)	玲瓏馬子(同上)
掃青生(床屋)	天平生(輿夫)	跳板生(俳優)
熏老(阿片)	踢(雨鞋)	開花子(土傘)
線(道路)	踏線(道を行く)	開碼頭(到處)
拜碼頭(面會の禮)	丟灣子(同上)	靠熏(阿片吸煙者)
熏管子(煙管)	青(茶)	混堂子(茶館)



紅花(酒)

餅子(銀貨)

被(被捕)

劈(摘斬)

書(牢獄)

啞吧密子(房廟)

威武密子(衙門)等々

會員の探試 哥老會員初對面の際、其の眞偽をさぐるに三合會と同様喫茶式でためす。茶碗の授受をして其の受けかたで眞偽を看破する。茶碗の數に應じて句がある、七言絶句の様なものである。字を知らぬ者もそれを暗記してをる。左に數例を擧げる。

- 一 仁義陣、碗二
  - 二 桃花陣、碗三
  - 三 四平八穩陣、碗四
  - 四 五梅花陣、碗五
  - 五 六順陣、碗六
  - 六 七星陣、碗七
- 以上は普通の喫茶式である。
- 七 龍陣、碗一

句「一朶蓮花在盆中。端記蓮花洗牙唇。一口吞下大清國。吐出青煙萬丈虹。」

- 八 雙龍陣、碗二
- 句「雙龍戲水喜洋洋。好比韓信訪張良。今日兄弟來相會。暫把此茶作商量。」
- 九 桃園陣、碗三
- 句「三仙原來明望家。英雄到處好逍遙。昔日桃園三結義。烏牛白馬祭天地。」
- 十 龍宮陣、碗四
- 句「四海澄清不揚波。只因中國聖人多。哪吃太子去關海。戲得龍王受須磨。」
- 十一 生尅陣、碗五
- 句「金木水火土五行。法力如來五行眞。位豪能知天文事。可算湖海一高明。」
- 十二 六國陣、碗六
- 句「說合六國是蘇秦。六國封相天下聞。位豪江湖都遊到。爾我洪家會詩文。」
- 十三 寶劍陣、碗七
- 句「七星寶劍擺當中。鐵面無情逞英雄。傳斬英雄二千萬。不妨洪家半毫分。」
- 十四 梅花陣、碗八
- 句「梅花朵朵重重開。古人傳來二度梅。昔日良玉重臺別。拜相登臺現奇才。」
- 十五 梁山陣、碗二十四



句「頭頂梁山忠根本。才相木楊是豪強。三八廿四分得清。可算湖海一能人。脚踏瓦崗一充英雄。仁義大哥振威風」。

以上の句は哥老會の内旨と典義を含めたもので、禪偈や公案のやうな形式をまねてをる。

令旗 傳令旗で綾羅を以て製してある、五堂の令旗と稱してをる。

黄 令（黃羅寶帳と云ふ）

當家令（將令、龍虎寶帳と云ふ）

管事令（紅令、中軍寶帳と云ふ）

以下は單に寶帳と稱する。

五堂とは公侯伯子男の五等に分けた稱呼である。

彪魁公 總總候 總總伯 總總子 總總男

五堂格のものは徽章に雙金花雙金珠を用ふる。當家は金花金珠、管事は金花或は金珠を用ひてをる。

會員證 會員になると會員證を授與する。之を寶と云ふ。白布に青色の印刷がしてある。會員は之を大切に所持してをる。此の寶を官憲の手に取られた者は嚴罰に處する。

會規 會の條規や約章は項目が複雑であるから、其の煩を避けて會規の一二を摘抄する。

第一條 宗旨、我等兄弟が規定した主旨は、我等祖先の大仇を報うる事、及び現在我等を虐待する種

種の暴虐的新仇を併し、滿洲皇室を逐ひ、大明の江山を回收し、且つ土地は公有財産として、富豪の獨占を許さず、我等四億の同胞及び其の子孫をして貧富の階級を生ぜしめず、一般に安々穩々に幸福を享受せしむ、云々。

第七條 追郵、會の公事のため努力して死亡した者、或は會のため累せられて死んだ者の妻子、又は甚しく貧乏で妻子を育くむことのできない者には、本會の撫恤費から、子女三人以下には毎月三元、五人以上には毎月五元を給與す。但し男兒は十八歳迄、女子は嫁入する迄とす。此の經費は本會の大都會及び左右都督から支出し、若し都督の經費が不足する場合は本會の樞密府から支出する、云々。その他の條項は省略する。以上は清末から民國五六年迄のものである。今日は必ず改正した所があるであらう。

會員の種類 從來、哥老會は無賴漢や浮浪の集結とのみ思はれて居たが、清末に兩江總督であつた湖南人曾國荃が會員の素性を調査すると、立派な位地の官吏や地方紳士が居るので退治の手段を變へた。或日、曾總督は騎馬で月夜微行して古廟の前に往つて門を叩くと、門衛が誰何したので曾は哥老會の暗號で答へた。門は開かれた。門衛は「九帥來」と叫んだので、一同數百名は東西二列に整列した。其の中に曾總督が上座に居つて刀を按じてをる。酒肴杯盤が盛られてある。曾總督が入つて來たので、皆びつくりして居る。曾總督が一禮すると、曾總督は上座に就いて、曾總督を一顧して「汝は吾



が隊長ではないか」と問ふと、髯叟は顔を赭らめて「然り」と答へた。曾總督は笑つて、吾の部下にこんな好い事があるのを何故知らせぬか、此處に並列してゐるのは皆頭目であるかと聞くと、髯叟は「然り」と答へた。曾總督はもう血を吸つたかときくと、まだと答へたので、曾總督は「よし今日は吾が牛耳を執るから汝は吾の次に居れ」と云つて一同血を飲みまはして誓つた。此事は久しく秘密を保たれたが其の姪の曾紀澤が曾國藩に密訴すると、曾國藩は大に叱りつけて、「お前達少年に何がわかるか。叔父さんの眼は遠くまで及んでをるぞ」と云つた。其の後劉坤一の如き豪傑も哥老會を懐柔して巨額の金を與へて居つたので彼の管轄内には被害が少なかつた。

(昭和二年八月)

## 北京乞丐社會

北京の乞丐は古來世襲となつて結束し、畢生同一徑路をとり、乞丐界を脱離して世間並に進出しようとする者は絶えてない。北京は乞丐正宗の發祥地とも云へる。其の組織、階級、行事が殆ど一定してゐる。左に其の概略を、北京風俗志の類に散見したものと筆者の見聞とから擧げる。

(1) 大丐頭(總元締) 大丐頭は北京に一人ゐて、絶大な権限を以て丐群を總統する。北京に丐廠と稱する本部があり、全市の丐群は大丐頭の管下に屬し、大丐頭の下に多數の小頭目がある。丐廠には嚴密な組織と規定があつて、それが不文律となり、等級が整然としてゐる。丐頭の勢力は廣汎に互り、北京の乞丐が其の命令に服従するばかりでなく、外來の乞丐(化子といふ)が北京に入り込むには、必ず手形(專帖といふ)を持參して丐頭に訪問の禮を行ふ(化子拜拜兒と稱す)。而して丐頭の認可を得て街頭に繰ぐ。此手續を取らないと直に逐立を喰ふ。

丐頭は終身職である。丐頭が死亡すると、新丐頭には年長者の人望あるものが推されて後任に就く。丐頭の下を乞丐は年長者を老太、次を老二、老三と呼ぶ。童丐は徒弟と稱する。丐頭の對内指揮權は、例へば甲丐と乙丐と地盤争をする場合、丐頭が調停すると、それに絶對服従しなければならぬ。市民の家に慶



事があるト巧頭は代表を派遣して喜施を受ける。仲間に出ると醫藥や看病の世話をする。死人があれば費用を集めて埋葬したり、警察に届け出る。此等は巧頭の仕事である。

(2) 慶事の喜捨 祝ひ事のある家、婚禮、祝壽、等の家には巧頭が出掛けて恭喜(祝辭)を述べると、其の家の貧富によつて差等はあるが、大抵四十錢から一圓位まで施す。祝壽は婚禮よりも祝儀が多い。それは孝子が父母に對する孝思の發露でもあるが、一面は乞丐が門前にたかつて、不吉な雜言をわめき立てないやうにするのである。施を受けると巧頭か小頭目か其門に「貴府喜事、衆兄不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>騷擾<sub>一</sub>」とかいた貼紙をする。此が魔除けになつて後から來た乞丐は素通りする。之に反して施をしないと、多勢の乞丐が集つて來て、惡罵怒號して騒ぎ、始末におへぬ不體裁を演出する。此は乞丐の戰術である。

(3) 呼聲と哭聲 乞丐が街に沿うて行路の人に呼びかけて物乞ひするに、先方の身分を看別して相當な呼びかたをする。例へば、

「大爺」、「大老爺」、「太太」、「老太太」、「少爺」、「相公」、「相公娘」、「大叔」、「嬌子」、「少姐」、「大奶奶」、「財主」、「財主媽」、「一官」、「老板」、「掌櫃的」、「大姑兒」、「老總」、「先生」等々。

此通りに人の身分を看別けるには非常な訓練を要する。之は仲間の先輩が熱心に徒弟に傳授する重要課目の一つである。身分の分りにくい外國人には「先生」、「洋先生」と呼ぶ。

「叫術」といふのは街を呼びまはつて物乞をするもの、又「坐乞」といつて路傍に坐つて乞ふものもある。

之には特に訓練が必要である。女丐が哭聲を學ぶのも容易でない。哭聲の高低、長短、悲哀等々、聽く人の心肝に徹せしめねばならぬ。女丐が路傍に坐つて涙を流し大哭する音調は悚々として人に憫隱を催させる。又女丐が幼兒をつれて街をまはり錢物を受けると哭き止んでお禮をいふ。男丐は人の肺腑を突き刺すやうな聲を吐から絞り出す。又糜爛した肢體を露して人の憐みを惹く。以上は叫術と坐乞の専技である。

(4) 技能の學習 科目は「頂鼻」、「擲球」、「穿舌」、「舞刀」、「彈拍」等々。乞丐外の専門藝人が自己の業務を侵さぬ範圍に於て、ひま／＼に教へ込む。其の藝人は一年に若干の傳授料を受ける。此の藝を習得したものは叫術や坐乞等よりも収入が多い。彼等が眞先きに受習するのは竹籃や茶碗を持つて物乞すること、又飯袋、鐵鍋を携帯する。鍋は煮炊用である。杖を持つのは狗を防ぐため、櫛櫛は乞丐の作業服である。人が古着を興へると、それは下着にしてボロで上張りする。どこまでも貧窶を標榜する。

此の外各種の藝當に必要な道具がある。胡弓、板子、鼓、劍戟、刀靶、犬架、鼠環、羊衣、猴帽等々。此等の學習は乞丐の選修科になつてゐる。

(5) 乞丐旅館 外來の乞丐が泊る處。北京朝陽門外天橋の南方一帶に幾軒もある。宿泊料一晚一錢。朝は早々逐出す。滞在を許さぬ。冬は其處の廣い部屋の土間に大きな穴を掘つて薪を焚く。それを火房子といふ。乞丐は其の火を圍む。其の中で乞丐歌を傳授する。極寒で外稼ぎのできない者には、旅館主が粥の炊き出しをする。其の食費は後日償還させる。一日分五錢。物價の高低で時に變化はある。



此の宿には男女混宿するので衣帯をとかず着たまゝで寝る。鞋でも脱いで置いたら翌日は誰かが穿いて往つて仕舞ふ。こんな火房子は北京に九ヶ處位ある。江南の暖地には無い。

(6) 歌曲傳授 丐頭が教へる歌曲には種々ある。諷刺や頌贊を寓したものの、縁起のよい歌曲が編纂されてゐる。其の節廻はしを日夜練習する。其の場合に応じて臨機に替歌をする。祝福の歌を惡罵に歌ひ替へる。左に一二の例を擧げる。

(甲) 祝福原歌

「烏龜上門來、老板大發財、」

(意譯) 龜が舞込んだ。親方大儲け。

「太太給我兩個錢、太太長壽萬萬年、」

(意譯) 奥様が二錢下さつた。奥様御長命萬々年。

「老爺大發慈心、今年獲利千金、」

(意譯) 旦那は御慈悲深い。今年千元お利得があります。

「太太施恩、抱子抱孫、」

(意譯) 奥様はお恵み下さるので、御子孫繁昌する。

(乙) 諷 罵 (替歌)

「不給我錢、怎過今年、」

(意譯) 錢をくれないから、今年が越せないよ。

「不給財、我不來、剩了錢、買棺材、」

(意譯) 錢をくれないや、オラ來ない。錢が残つたら棺桶買へよ。

「儂不給我、我不乞、看、儂子死急不急、」

(意譯) お前くれなきや、オラもらはぬ。看とれ、お前の子供は今に死んで仕舞ふから。

此の類の歌詞は澤山ある。中には聞くに堪へない鄙猥な毒舌惡罵がある。その音調には悲痛慘烈なのがある。到底乞丐の藻思ではできない、原作者が隠れてゐると思ふ。

(7) 新乞丐 近年、農村が疲弊して新乞丐が増加し、其の藝當も種類が増へた。左の如く

(1) 排刀、手に二口の長刀を持つて胸を露はし刀を振り、急振するにつれて氣が満ちて「ウーン」と唸る。多く寺廟等熱鬧の中で活動する。怒めしい聲で「老爺太太」を叫ぶ。「ウーン」と唸つて力一杯に刀を振る中に胸が赤くなり腫れ上つて血がにじむ。見物人はハラ／＼して錢を投げる。

(2) 打磚、街頭に坐つて磚で自分の胸と背を打つ。終に肌脱ぎになつて打ちつけるので出血する。而して聲なき聲で行路の人に「老爺太太」を叫びかける。

(3) 打磚叫術、街中を磚で胸を叩きながら哀なき聲で、「旦那様奥様、此の盲目の不具者に一文下



さし」と叫び、ボン／＼と磚で胸を叩いて叫聲の拍子をとる。

(4) 叫街、打磚のできない老弱者が、柳條製の籠(ゴミトリ)を持つて悲痛な叫號をして廻る。以上(3)(4)は街を廻ることは許されるが、人の門口に立つことは禁じてある。

(5) 釘頭、口に長い尖つた金釘をくはへて、手に磚を持ち、頭に一本の長釘をさして、人の門口に立つて黙つてゐる。錢を興へると去るが、興へないと磚で頭上に釘を打込む。カン／＼と響く。頭に腫物のやうなのがあつて、それに釘を打つので血が流れる。それを見ると錢をくれて逐拂ふが、さうでないといつまでも立塞つてゐる。此の種の乞丐は街の片側だけ通ることを許され、兩側通行は嚴禁してある。

(6) 拉破頭、手に鎌を持ち酒に酔つてから出懸ける。人の門に立つて錢を乞ふ。錢をくれないと拇指と食指で鎌の尖先をつまんで一分ばかり刃を出して自分の頭を引掻き、血が迸出するとそのはづみで打仆れる。其の時錢をくれないと門を離れない。以上は血を見ることを嫌ふ人の弱點に對する流血戦法である。

(7) 數來寶、此は北京の乞丐に最も多いもので、其の種類が三つある。

甲、敲中肋骨、左右の手に牛の肋骨を一つ持つて、其の兩端に鈴をつけ、又綺麗な絹片をさげてゐる。其の骨を叩くと「吉瓜吉」と音がする。又「花鈴鈴」と聲がする。歌をうたつて錢をもらふ。

乙、刮竹板、右手で大きな割竹を、左手で小さな割竹を振り鳴らして歌ふ。

丙、敲飯碗、花紋様の帽子を冠り、青磁の粗碗數個を打合せて、丁丁と音をさせて歌ふ。其の面に紅や白粉をぬり人をイヤがらせて左の文句を歌ふ。

「あちらも要、こちらも要、親方お食事に私は來ました。ア、怒らないで一錢下さい。スグ往きますから」

(8) 背拾子、風呂敷のやうなものを背負うて門に立つて物乞する。其の時男に對して「大叔」女には「嬌子」と呼びかける。それを間違へて「老爺太太」と呼ぶと、乞丐の規則違反で處罰され其の組から除名される。

(9) 蓮花落、二人の乞丐が花紋様の衣物を着て、面に紅白粉をぬり、花帽子をかぶり、手に竹竿を持ち、其の竿の幾箇かに穴をあけて、一厘錢を五色の絹糸で結び、物乞する時に旋轉して跳舞する。奇聲を發して歌ふ。

(10) 打玉鼓、手に長い竹筒を持ち其の端に皮がはつてある。それを指でたゞき、低い調子で小曲を歌ふ。

(11) 橋梁架子、一本の竹箒を鼻の端に立て其の上に茶碗をのせて、いつまでも落ちないやうにして門々をまはつて物をもらふ。



(12) 雙鱗鑽洞、手に鐵鈎を持ち、鼻と咽喉の間の洞に鐵鈎を通しながら錢を乞ふ。  
 (13) 點鳳頭、眉間に粗い針を挿し、其の針の尖頭に碗をのせて揺り動かしながら歌ふ。(以上八種は店頭や門口で物を乞ふことを許されてゐる)

(14) 賣凍、身寄りのない幼児を利用して金儲の犠牲にする。寒冷の時幼児を裸かにして鍋に入れて置いて路人の憫みを乞ふ。幼児も馴れて仕舞つて平氣である。

(15) 弄青蛇、北方の寒地に飼育した一種の小青蛇を幾疋も竹籠に入れて背負ひ、人家の前で蛇を弄ぶ。此等の乞丐は蛇の性質に精通してゐるので、人に頼まれて蛇捕りをする。又蛇の皮や蛇の膽を賣る。或は寺廟の縁日に水蛇を捕つて、信佛の老夫人達の放生に賣り、それが川に放たれると、翌日其の蛇を捕つて他の人に賣る。其の収入は馬鹿にならぬ。

下に掲げるのは不具な廢殘者で、市街を廻る事は許されてゐるが、人の門に立つことは禁止してゐる。

(16) 日落西、兩眼失明の乞丐で手に棒を持つて地を叩きながら哀叫する。片手の麥稈帽で錢を受ける。

(17) 摸光明、盲丐が路傍に蹲んで、ソロ／＼と移動して物をもらふ。

(18) 獨眼龍、一眼失明の乞丐が杖にすがつて歩き、日落西のまねをしてゐるが、片眼で路徑は見

分けてゐる。

(19) 翻太歲、手足が全然廢斷されて、全身汚泥の中をコロガリながら哀號する。一人の乞丐がついて一切の世話をやき、もらつた錢を代收する。此の種の乞丐はもらひが多い。

(20) 看照壁、兩足が廢斷して布で膝頭を巻きつけて移動する。

(21) 墊木手、兩足が斷たれて歩けないので兩手に木塊を握り、足の代りにして這ひ廻る。

(22) 解糞草、廢殘の女丐が小さな木車に臥てゐるのを兩人の女丐が前後押して哀叫する。行人は其の車に錢を投り込んでやる。

(23) 蛇石頭、男丐が廢殘の女丐を背負うて、呻吟しながら街を過ぎる。

以上は北京乞丐の概略を敍した。北京に住んで紳士の體面を保つには、乞丐の常習を知つて置かないと、とんだ嫌な不體裁に遭遇することがある。私も地方を旅行して屢々乞丐の群に取巻かれ、進退谷つたことがあつた。英國宣教師が教會の歸りに乞丐に取巻かれステッキでなぐりまはしたところが、男丐等が無數に飛出して袋叩きにあつたこともあつたと記憶する。乞丐社會は強固な聯絡と團結や制裁を持つてゐる。支那では強靱な一族である。

(昭和十六年十月)



## 支那の文房四寶に就て

文房具とは何かと申しますと色々昔から説がありますが、文房といふものは「典章文翰處」といひ書類やなんかを置いてある所なので、文房といふものは、今の書齋であらうと言はれてゐますが、考證は抜きにしまして、書齋といふのが當つて居ると思ひます。それから文房具といふものも、今は非常に種類が多くなつて、鋏とか小刀とかいつたやうなものまで入れて居りますけれども、昔は文房具といへば、筆墨紙硯の四つを言つたもので、これを四寶として居ります。つまり、この筆、紙、墨、硯といふものが文房の四寶で、他は附屬物だといふのであります。

宋の葉夢得といふ人の「避暑錄話」の中に歙州（安徽）に文房の四つの寶があると云つて居ります。四つの寶として「紙、筆、墨、硯」を文房の四品だと云つて居ります。

## 硯

先づ硯の話から始めに申上げます。「硯」といふのは字としては元來「研」が本當であります。之は「研ぐ」といふことであります。それが硯といふ字を使ふやうになつたのは後でア、いふやうに云つて來た

であります。兎に角墨をするといふ意味であります。

早速「端溪の硯」に就て簡単に私が見聞しましたことだけを申上げようと思ひます。施閏章といふ人の「硯林拾遺」といふ本に出て居りますが、端溪の場所は廣東の肇慶府の稍々南の方にあります。端溪といふ河があつて、これは一名端江といひます。此處の山の半分水浸しになつて居る處の穴から出る石が一番硯に良いのであります。これを「水岩」といひまして、硯のよいところは水岩だとされて居ります。それから「水坑記」といふ本にも水岩のことが書いてあります。水岩といふのは明の末頃に開かれたのが一番終りで、宣德年間、つまり明で一番文明の盛んだつた宣德年間に開かれたのを宣德坑と云ひます。唐の時代には端溪の方はなかつたし、宋の頃にも未だ水岩といふ石の層は開かれて居なかつたので、その外のところでは採つて居つた。清朝の頃調べられましたところに依りますと、石の層が普通は一尺餘りで、その層が三つあります。層と層の間は大分隔て、居ります。第一層にあるものは一種の皮石といふものであります。その下の底になつてゐるのが一番いゝのでこれが水岩であります。その色は非常に潤ひがある。膚觸りがしなやかで恰度年少の人の膚觸りのやうで、息を吹掛けると曇つて水が溜るやうになつてゐます。支那では非常によい硯の形容を「玉の如し」といふ。支那人は何でも良いものには「玉の如し」といふのであります。

その水岩の次に朝天岩といふのがあります。石の色は稍々乾燥して居りますが、硯材としては最も豊富



で賣品にはこれが多いのであります。その上に水に遠い屏風背といふのがあります。そこは概して良くない硯で、硬くて叩くと「かん／＼」と澄んだ音がする。かん／＼と音するのはよくない硯であります。唐秉鈞といふ人の文房肆考圖説といふ本にやはり同じやうなことを書いて居ります。これに據ると上層の石は粗末で荒い。中層の中にあるのは「眼」がよい。その眼には孔雀の眼のやうな形のものが多い。みなその水に近い方の底になつてゐる方の石が取りにくい、一番良いといふことが何れの説に依つても分るのであります。

硯を掘る坑は澤山あります。斧柯山といふ山がありますが、その山の下にあるもので大秋風、小秋風、それから獸頭、獅子、桃花河頭、新坑、黄坑などがあります。此處の石は灰青色で眼が幾つも掛つてゐるが眼に輪(臺)が少い。それからまだ澤山坑がありますが、省略します。梅花坑といふのがありますが、そこにある子石といふのが非常によいのであります。岩の中に含まれて居る石の中から更に硯の石を取るのではありませんが非常に質のよい石が出ます。色は漆の様なものあれば、紫の濃いものもあります。肌が細かく潤ひがある。「玉の如し」といふのが何時も褒め言葉であります。そこにある眼は非常によくてそれは輪(臺)が四つも五つも廻つてゐる。その真中に象の眼のやうになつてゐる黒點があるのが最も良いので、斯ういふ硯になりますと墨と硯の間が如何にもよく密着して、すらく／＼として擦ると硯と墨の具合が宜しい。私が廣東に参りました時、この子石を買ひましたが丁度羊羹の切片のやうなもので大變手ざはり

が良いものであります。

卵石といふのがあります。之は中層の岩の中からえり出したものであります。石の色は紫で手ざはりの柔いものださうであります。一度も見たことはありません。仲々さういふ風なものには大きな硯はないのであります。乾隆皇帝の御物にさういふものがあつたといふことを聞いて居ります。これは叩くと音がしません。どす／＼と鈍く重く響きかん／＼とひびきません。墨をすつても音がしない、叩いても音がしない、墨をすつて聲がないといふことがこの硯の一つのよい條件になつて居ります。斯ういふものは端溪でも仲々出ないのであります。

眼は大別すると三つになります。一體石の眼といふものは木に節があるやうなものでありまして、餘り多いとよくない。三つの種類の中で活眼といふ眼が一番良く、それは黒と黄色がかつたのが交つて眼の所には眞黒い瞳があり、底が透明に見えるといふやうなのが活眼の一番良いのださうであります。

涙眼、之は眼の四方はぼつとして居りまして、外から浸み込んだやうな形になつて、その眼が甚だ鮮明でないが、之はないよりも良いといひます。

死眼、之は全く死んだ眼で、瞳のない朦朧としたものであります。

眼には又澤山の名稱があります。孔雀の眼、雀の眼、鶏の眼、猫の眼等、私は猫の眼を見ましたが、瞳が猫の眼のやうに眸子が堅に入つて居ります。それから小豆のやうな綠豆眼等があります。眼は色が青味



がかつて居るのが一番よくて、その次は柿色で赤が一番悪いのであります。

眼の外に紋（石理）の問題があります。これは火の上で焼いたやうな赤いのが悪い。石も劣等で話になりませんけれどもそれでも寶品によくあります。

蕉葉白といふのは芭蕉の葉のやうな型がぼうつと出て居ります。その石に限つて肌ざはりが柔くて擦り具合が非常に良いのであります。もう一つは魚腦であります。之も見ましたがぼうつと煙のやうに白味が浮き出して居ります。それはいろ／＼あります。中には丸味がかつた恰好のがありますが、殊に墨あたりが良いやうであります。

私に向ふに行つて來ましたときのお話を覚えてゐるだけを申し上げます。明治の終頃、私は康有爲さんの紹介で上海から廣東に行きました。他の用もありまして、端溪を序に見て來いと言はれて參りましたが、却々端溪の城から遠いところで、地域が廣く、方々に掘る處があつて一々見ることは出来ません。一番良い水岩の方の採石を見ました。そこは廣い立派な坑だと思ひましたが、岩穴が狭ばまつてゐて初の處は吾が入つて直立して行かれますが、段々入り込んで行きますと下に下る程暗澹として、蠟燭や松明を持つたものが一人二人づつ一列十人位の一團にはさまつて行く。さうすると下に下る程水の音がしてひや／＼して寒くなる。春でも寒くて冬のやうに思はれます。一番先に行く者が小さい石をポツ／＼抛り込んでその音で水の深さを見ながら松明で様子を見計つて足場をさぐつて行きます。さうすると石が横の方や頭

の上に出て居る處に着きます。それを横向きになつて掘つたり、或は狭い所に乗つてコツ／＼きつたりします。そして之を掘りますと五寸或は一尺位の大きさに割けて來ます。それをどし／＼掛聲をして人夫が上に持上げて行きます。

其の後もう一度大正六年頃一寸參りましたが、此のときは朝天岩といふ岩のところに案内して貰ひました。その時の話に水岩の場所に依つては水の多い所は一日、又は二、三日掛つて水を汲み出す。多いところはポンプでも使つて居るかといふとさうでもなくて、下から汲み上げて、それを上から人が受取つて一番上に來た處で笕を作つてある所に水をあける。その笕の先では近所の者が下に來て洗濯をして居るといふやうなのんきな風景です。さういふ風にして實に面倒な、非文明的な掘り方をして居るのであります。

細工はどういふ風にするかと思つて、工場を見せて貰ひました。工場の主人が康有爲と親類だったので一晩泊めて呉れました。そして荒削りから仕上げまで見せて貰ひましたが、荒削りの職工は十五、六人位居つてガン／＼音を立て、石の皮面や側面を切落します。大工が木を削るやうです。その次が五、六名の職工が居りまして、縦から見、横から見、硯の型をつけますが、或は天然の形のものとか、圓いもの、長方形のもの、楕圓形のもの、四角いもの、幾らでも石に依て造る。殆んど同じものはありません。第三番目は五、六人の職工が居りまして、硯の型の出來たものを削つて、硯の面と背をつけ、それから第四番目の職工の方に渡します。其處には四、五人の職工が居つて、此處のは稍々熟練して居るやうで硯の面や池



の型をつくり、線を引いて、薄い刀や厚い刀で切るのです。恰度吾々が羊羹でも切るやうに昔もさせずに  
スツと切れて行きます。第五番目が最も熟練工で四、五名、中磨き、硯の中仕上を掛ける。いろんな丸い  
砥石や四角い砥石を以てやるのであります。切碇琢磨といふ言葉のやうに、叮嚀にゆつくりとやつて居り  
ます。一人々々一つの硯に掛つて居る。六番目に愈々硯の仕上げです。この職工は三、四名或は四、五名  
が別の室を持つて居りましてテーブルの上に毛布のやうな柔かいものを置いて、煙草や茶を飲んで、何時  
仕事をやり出すか分らんやうに遊んでゐる、さうして極くゆる／＼砥いで休み砥いで休みしてゐま  
す。さうして時々手の掌で撫でて見る。又少し擦つては頬つべたに當てゝこすつて見る。お爺さんで頬つ  
べたの引込んで居る者は腹にこすり當てゝ磨き加減を見る。如何にも叮嚀なやり方であります。それから  
裏とか横とかに故人の句や繪を彫つたり、或は山水の形を出したり、花や蟲などを彫ります。恰度筆屋が  
筆の軸に丹念に彫つて行くやうに實に樂に彫つて居ります。それで今吾々が店で有名な故人の硯銘などが  
彫つてあるのを見て、それを故人の持物だと思つて持つて歸つたりしますが、大抵は此處で模彫して居る  
のです。人の話を聞きますと、北京を持つて来て色々拵へるやうですが、北京のは私は見ません。

斯ういふ風にしまして一つの硯を完成する迄には、端溪では上等品は一週間或は二週間以上もかかりま  
す。その仕上げも悠々として、知らん顔をして、明日の日もあるといふやうな態度でやつて居るのを見て  
つく／＼感じたのであります。支那文藝は斯ういふ所から出て来るのではないかと思ひます。つまり硬

いものから柔か味を出して行く。而もその出し方が如何にもゆつくりとしたもので、仕上げを見て居りま  
すと何とも云へない感じがします。やはらかな絹布を澤山使つて磨いた、一見宋の時代や唐の時代の硯と  
間違はれるやうなものはみんなこゝから出るものであります。宋の硯に似せたものでも、實際餘程眼識のあ  
る人でないとはつきり分りません。さうして又、黒い油をひいて磨いたりするので二、三百年も経つたや  
うに見えます。

此處に入り込むには第一回は未だ清朝の時代で却々やかましかつたのです。二度目の時も新政府の出来  
たてで、やはり出入が八釜しかつた。私は硯買ひの商賣人のやうな恰好をして、弾けない算盤を持つて入り  
込みゆつくりと話を聞きました。其の頃は仲々日本にまで輸出する程は出来ないとやつて居りました。

端溪硯に匹敵する硯では安徽に出る歙硯があります。安徽の婺源縣に龍尾山といふ山があります。その  
西の方の武漢といふ處から出る石は硬くて強くて發墨がよい。之を歙硯又は歙溪と云ふのです。その中に  
金星と言つて金色の星が入つて居るのが尊い。その星の斑點が鮮明で點々とするのが最もよいと言つて居  
ります。その星の形が龍尾星のやうになつて居るのを龍尾金星といひ、非常に尊いものであるが却々少な  
いさうであります。

その次に位するのが花瓣です。花びらが落ち敷いたやうに落花の形を成したのがよいと云はれて居りま  
す。金星のある石は多く黒綠色がかつてゐるやうであります。或は蘆あしの花のやうにぼうつとしたのもあり



ます。それから金星の中にはスツと小さい線が一杯に引いてをります。或は眉毛のやうにスツとなつたものもあります。それから鶴鳩斑といひ鶉の羽の紋に似たものがあります。それは白いものもありますし、黄色いものもあります。白いは銀星、黄色いのは金星で、銀星は金星の次に位する。但し、さういふ紋のないもの、星のないのは論ずる値のないものだと言つて居ります。龍尾星のものは端溪のものよりも石の質に於いては勝つて居るといふ評判であります。その紋には幾つも種類がありますが、羅紋と云つて薄絹の繊維のやうな紋があるのは、一番石の質がよくて潤ひがあります。

その次のものは刷目のやうな線があります。一皮内側にあるやうに底の方に見えて居ります。

それから金星と銀星と刷目と一緒になつたものがあります。これは多少段が落ちるやうであります。矢張り非常に風雅なものださうです。之は私はまだ見たことがありません。それから又眉子と云つて爪跡のやうな紋の入つてゐるのがあります。之は見ましたが、一名を臥蠶ともいひます。

以上は舊坑時代に出たものであります。舊坑といふのは五代の後の頃開いたもので宋の頃にはなくなつたといふことであります。

次に金星新坑といふのがあります。これは金星岩が主ですが、金星の餘り多いところは硯の質はよくないやうです。大抵硯を作る人は金星を硯の面から外に出すやうに作るさうです。私は昨年南京の方に行きまして硯を買つて來ました。よく分らないので、此の金星が一杯あるのを買つて來ましたが、今考へると

やつぱり墨當りがガンガンしますのでよくない。それから銀星新坑のもので、硯の面に粟粒程の大きさの白い點々が澤山ある。色は薄い青色、斯ういふのを買つてはいけないと書いてあります。非常に磨り具合が悪い。支那に於ける硯の二大宗は端硯と歙硯である。

硯の出るのは決して端溪と歙溪だけではありません。山東から出る紅糸硯、之も極く上等なものであります。山東方面からはこの外、黄玉硯とか玉石硯とか色んな硯が出るやうであります。いづれも端硯や歙硯の上に出るものはない。

それから泥で固めた硯、澄泥硯、之は私は何處で造るのかと思つて居りましたが本に據りますと、陝西省の饒州といふ所に主に出るさうです。これは唐の時代の硯品といふ本に出て居ります。其の頃陶器を造る者が河や海の泥を取つて來て瓦を造るやうに造るさうです。澄泥硯で一番良いのは鮮黄といつて、饒のやうな鱈魚のあの黄色がかつた色をしたものださうです。その次は黄いのが良い。その次が蔷薇色のもの。紫色は大分品が落ちるさうです。それでも今は仲々品が少いさうです。それから豆の花に似たやうな斑點のあるものがあります。又細かい浪みみたいなものが澤山現れたものもあるさうですが、餘りさういふもの現れてゐるのはよくない。なるべく無地の方がよいと云はれます。

唐桐園といふ人の澄泥硯の記といふのがあります。それには山西の絳縣の人がよく澄泥硯を造つた。その造り方を書いて居りますのに、絹の袋を絳縣の汾水といふ河に放り込んで一年放つて置く、その中に細



かい泥が沈澱したのを採つてそれで造る。之は非常に上品で澤山はない。普通は二重の布袋の中に粘土を入れて、水の中で振盪すると細かい泥が布を濾して溜る。それを又清水に澄まして、引上げて置いて少し乾いてから黄丹を入れて、麵粉を捏ねるやうにして捏ねる。多く捏ねる程よい。粘りが出たところでそれを型に入れて壓搾する。稍々それが固まつたところで今度は竹の庖丁で切る。それで硯の型を先づ造ります。又陰干しにして乾いてからよく切れる刀で本削りする。それが出来てから又日向に干して、糖に牛の糞を混ぜて竈に入れて焚く。牛の糞は火が弱くて非常によい。焚いてから艶を出す爲に、黒い蠟を掛ける。そして焙烙の中に入れてそれを蒸す。五、六回乾かしては蒸し、乾かしては又蒸したのが澄泥硯の出来上りです。今日造るのはそんな面倒なことはいらない。それから江南の方、寶山縣でも出来るさうです。その邊は海濱の河底に沈澱した泥で造る。日本でもよくやつて居ります。筑前で造つた泥硯といふものを見たことがあります。横井小楠の一派の人で米田米渚といふ人が澄泥硯を焼いたといふのが肥後邊りに今でも残つて居ります。矢張支那のやうに川や海の泥で造つたのであります。

それから木で造つた硯、北京に幾らもありませんから御存じの通りで、砂と漆を塗り込んであります。日本では朴の木或は桐の木に砥の粉と漆を混ぜて塗り込んで幾十回も塗り込んで砥ぐと上等のものが出来るさうです。然し大抵は二三十週で止めるから昔程よいものではありません。私は京都の五條あたりでお爺さんが造つてゐるのを見て大變よいと思ひました。又私の郷里の熊本縣で造つてゐるのを見ました。之は今

造りません。

もう一つは竹の硯、之は湖北の武昌、湖南の益陽で竹の多く出るところで小兒用の粗末な硯を造つて居りました。竹を二つに割つて背の高いところを硯のやうに造ります。私は日本では京都の竹で造つたのを見ました。仲々發墨がよい。詩人の篠崎小竹は竹硯を愛しましたさうで、その竹硯を私の友人が傳へて居りましたが之等は大變によい形をして居ります。

陶器の硯、銅の硯、鐵の硯などもあります。玉の硯、陶器の硯は餘りよくない。鐵の硯も墨あひがよいかどうか分りません。私は内藤湖南氏が持つてゐた家寶十二寶の中の一つの唐の銅硯を見たことがあります。すが、實に風雅なものでした。

それから瓦の硯などもあります。之は御承知の通り漢磚や魏の銅雀臺の瓦があります。宋の時代には漢の瓦を模造した硯が澤山出来て居ります。精製したのは發墨がよいやうです。

それから昨年見ましたのは、石炭で作つた硯、之は撫順で出来たもので、却々よく出来てゐて墨あたりがよい。但し軽くて擦るたんびに動くから不便です。而してこれは決して高雅なものではないです。

雲南に出る硯は割合に良い物が出る。端溪とよく間違へるのであります。私も一つ欺されて買ひましたが、矢張り端溪のやうに羊羹色をして居ります。

朝鮮境の渭源縣、其處に出る硯は矢張り端溪のやうな色をして居りますが餘りよくない。安東の近所の



橋頭に出るのは細工も餘り風雅でないし、石も餘り良くない。併し松花緑石といふのは松花江の附近の石で質がよいと書いてありますが、實物はあまりよくない。端溪とは比較にならない。朝鮮端溪といふのは矢張り色がよく似て居りまして良いものがあるさうです。私が見たり聞いたりは大體そんなものです。

硯の手入は却々難しい。硯の保存の仕方にならぬ施閨章の書いて居るのを見ますと（硯林拾遺、却々やかましく言つて居ります。漆塗の木箱に入れて乾燥を防ぐ、それから紫檀の箱でも良い。しかし紫檀よりも漆の方が良いと言つて居ります。

それから硯を洗ふことがやかましい。吾々人間の顔は三日洗はないでも硯の顔は三日洗はないとよくないと云ふ。之は一つの諺になつて居ります。私が知つて居る非常に硯の好きな人が上海に居りまして、黃氏五百硯齋と言つて五百硯を持つて居ります。その人は毎朝顔を洗ふときに別に硯を水につけてそれと同時に連の葉の出たところを切つて水に浸してそれで拭くさうです。

それから高廉といふ人の「燕間清賞」といふ本を見ますと、半夏といふ草の根があります。その乾いたのを切つてそれで擦ると垢がよく落ちて硯の面を害しない。後を拭くのには布ではいけない。糸瓜の芯で拭はなくては行かないと書いてあります。却々八釜しいのです。近頃聞いた話ですが、良い硯は使用せず久しく打捨て、置くと硯は死ぬ。そして價值が失せる。之を復活させるには、一人の僕を備ひ、毎日硯を

清水に沈めては引上げ、自然に乾いたところを又水に沈め、斯様に朝八時から水を汲んで夜半まで繰返す。それを一年乃至二年連続すると、硯に活氣を生じ、發墨も數倍の味を出し、其眞價は數十倍になる。斯ういふ風に支那人は非常に硯を愛玩します。硯を獸友と云つてゐます。四、五日前も或る店屋に行つて獸友を見せると云ふと硯を澤山見せて呉れました。獸友は硯に對するよい言葉だと思ひます。硯のことを書いたもので硯譜といふのがあります。手近い處を申上げますと紀曉嵐と云ふ清朝の學者が自分で持つて居つた硯を拓本に取つて刊行した「閱微草堂硯譜」といふのがあります。もう一つは清朝の宮廷の御硯を繪に描いた「西清硯譜」といふのがあります。之は從來時たま賣品があつたのですが此の頃見つかりません。北京の東方文化事業の圖書館の中に一部あります。それから上海で廣倉學會といふ處から「廣倉硯錄」といふものを刊行して居ります。之にも多くの硯の形が出て居ります。其の外硯譜はいろいろあります。故宮博物館にも拓本になつたものがあります。

それから日本で先年出来ました著色の硯譜があります。之は一見して硯の質が分り、非常によいものです。今でも古本屋には時々出て居ります。私の眼に觸れましたのはこれ位のものであります。

硯に關する著書では、日本では未だ生きて居ります前軍醫總監飯島茂氏の「硯畧新語」があります。それには支那、日本、朝鮮、臺灣の硯を網羅して研究して居ります。参考書も澤山書いてありますし、風雅の方面から見たのと科學の方面から分析したのと兩面から研究してありまして、私などには有益な書であ



ります。

私は端溪等の工場を見まして、前述しましたやうに支那文化と硯の關係といふものに就て深く感じました。又硯の形といふものは同じものが仲々ない。特別に對副に作つた以外には同じ形のものはないと言つてもよい位であります。乾隆時代、劉といふ人が居つて或る人と兄弟の契を結んで服も帽子も靴も同じにしたが硯だけは同形のものが得られなかつたといふ挿話があります。それから上海の五百研齋其他で見ましたが、硯の形は精粗簡繁、實に驚くやうに澤山あります。

兎に角、硬い石から柔か味を出して行くといふところが此の硯の長所だらうと思ひます。硯に就ては之だけ申上げて置きます。

### 墨

次に墨の方を申上げます。墨は昔は石墨—石の墨と云つて居ります。「大戴禮記」といふ本に「石墨相着する」と云ふ句があります。それから墨刑(入れ墨)といふのがあります。これで見ると墨といふものは餘程古くからあつたらしく、春秋時代からあつたと思はれます。

墨といふ字が「黒」と「土」と合せて出来てゐるのを見ると元は礦物ではなかつたかと思ひます。石炭の粉、粉炭みたいなものを使つて間に合せにしたものではないかと思ひます。後世に松のヤニの煙で造つ

たのは石墨が進化したものではないかと考へます。

「丹鉛總錄」といふ本によりますと、魏晉の時代に墨丸即ち墨の丸といふものがあつて、それは漆煙或は松の煤を以て造つたさうであります。すつと後になつて明清の時代に丸い形の墨が残つて居ります。晉の頃は今のやうな墨池のある硯が無くて中の凹んだものを造つたのではないかと思はれます。宋の晁貫之といふ人の「墨經」といふ本があります。それに據れば、晉魏の時代から石墨がなくなつて松煙で製造することになつた。それが大變長く續いたと云ひます。さうして漢の時代には陝西省の終南山邊りの松が一番良かった。あの邊に松の枝を取りに行つたのです。晉の時代には九江の廬山の松が非常に尊ばれて、衛夫人の筆陣圖と云ふ書に依ると墨は廬山の松煙を取ると書いてあります。それで見ますと廬山は今のやうな禿山ではなかつたと見えます。それは兎に角として松の木は油が多いのでよく使はれます。唐の時代は易州、瀋州(山西)邊の松がよかつたし、五代の後唐に行つて安徽省、宣州の黄山の松、歙州の影山、松蘿山、さういふところの松を用ひた。それらの爲に安徽省の墨が名高くなつて來たと思ひます。それから墨を造る煤煙の取り方、之も墨經に書いてあります。昔は高さ一丈餘ある竈の内側で松の枝を焚きその竈は腹が廣くて口が小さい。竈の上に煙突はつけずに穴をあけて、其處に五斗入位の甕を被せる。さういふ甕を五、六個被せて、煤がその底に厚く溜つたら火を止める。そして雞の羽の扇子で掃き取る。その煤には、幾つも種類があつて二品から五品位に分れて居ります。清朝に入つてからは主に横嶺を使つた。その竈は



長さ百尺もあり、深さ五尺、高さ三尺、口は一尺位、その口から松の木の枝を三本から五本入れて、徐々に焚く。五本以上は煙が荒くなつて煤が細かにならない。白い灰が残ると掻き出す。それを七晝夜焚く。さうして竈が冷えてから煤を掃くのであります。上等品になりますと煤を拇指と食指で捻つて見ますと指紋の間に入つて洗つてもどうしても落ちない。その煤は玉のやうに綺麗でふか／＼して居る。悪いのになりますと大きな煤がころ／＼してゐる。煤はなるべく軽い程よいと云はれます。

萬壽祺と云ふ人の墨を論じた本に昔は松煙を使ひ今は桐油を使ふとあります。松が少いから桐の木の油を焚いて使ふ。さうして膠は牛の膠と、鹿の膠を入れるが、牛より鹿の方がよい。それから中には米を煮て作つたお湯をまぜることがあります。膠が少し固すぎるとか云ふ場合にお湯をまぜるのださうです。

墨の良いのは明の宣徳時代のもので、此時の天子の御墨は以前にないやうな良い墨だつたさうです。その時に矢張り良い墨を造る人の名前が幾人も残つて居ります。方子魯とか邵氏とか澤山あります。

製法は嘉靖年間に又進歩し、萬曆頃になつて、更に進歩して來ました。その製造法もいろ／＼書いてありますが、煤一斤に膠の溶かしたものの五合、その位の割合で入れて、それがすつと冷めるまで待つてから捏ねる。その墨の造り方、捏ねるのも實にゆつくりしたものです。少しづつとろ／＼と混ぜては捏ねる。それから石器に入れて搗く。その杵数は三萬とか五萬とか言つて多く搗けば搗く程よい墨が出来る。それ

で各々その造る人の家には秘傳があつて仲々人に教へない。一軒々に特徴があつて、明から今迄残つてゐるのが四、五軒あります。昔は朝鮮の高麗墨といふのは大變よかつた。私が曹素功と云ふ家で見ただ中に日本の墨が幾つもありました。古い墨で何時頃か分らないが天保以前の墨だと言つて居りました。その日本墨は非常に固い墨でありました。

日本の古墨にも却々よいのがありまして決して馬鹿にならない名墨があります。明治年間に梅仙といふ老人が非常によい支那風の墨を東京で造つて居りました。資本が少なくて墨のよいのは不慮は造れないが文人や學者から二十圓、三十圓とお金を寄せて來ては造つてゐました。赤坂の溜池の所で造つて居りましたが、その人は土を深く掘りその中に紙の數帳を張つて、松脂を焚いたり、松の枝を焚いたりしてその煙を掃いて造つた、仲々立派なものがありました。當時の支那公使李盛鐸は、支那墨もかなはんと言つて何時も四、五本づつ取つて居つたやうであります。一番大切なことは膠とその煤煙の合せ方で、これが一番難かしいと云はれます。

それから墨の磨り方がありますが、縦にゴシ／＼磨つてはいけません。手前の方に向け内に圓く磨る。縦にばかり磨ると硯の面に筋が立つやうになる。痕がついていけない。どう磨るか云ふと指でつまんで圓く磨る。さうすると墨も細かく、硯にも隙らず、筆で書く時ものびが良い。

墨の保存法、之も矢張り八釜しいことを言つてをります。よもぎの葉の乾いたのを墨を入れた箱の周圍



に詰めて置くとも雨が降つても微が生えない。それから雨期には石灰の中に墨の箱を入れて置くとも良いさうです。墨を買ふ時には平つたい墨よりも部厚いのが持ちがよく、ひびが入つて割れたりしないからさういふものを探んだ方が好いと言ひます。それから墨譜があります。明の宣徳から萬曆にかけて製造は非常に進歩して來まして、その明墨の優勢なのは清朝の乾隆墨に迄も導いて來たものと思ひます。乾隆墨は文明の墨を凌ぐと云ふことになつたのは段々技術が進歩したからでせう。

墨譜に程氏墨苑、方氏墨譜、曹氏墨林等色々あります。今多くあるのは涉園墨華十六冊で、之は天津の陶湘といふ人が出した本であります。それに多く網羅して居ります。之に就て私の杜撰の考へを申し上げますと、明代の文化といふものには、御承知のやうに西洋文化が非常に浸潤してゐる。殊に萬曆の頃には耶蘇教が到る處に入り込んで布教に努めて居ります。マテオリッチのやうな人達が政治とか經濟や軍隊のこゝとや、農業、天文、工業界、さういふ方面に色々西洋文化を入れて居ります。だから墨の製造にもその手が加へられてゐると云へると思ひます。私は北京の輔仁大學校長陳垣氏の著述を買ひました。その著述は明の末の繪畫美術及ローマ字音譜といふのですが、その中に墨の圖があります。それに新譯聖書にある耶蘇が漁夫に説教する。所謂魚を漁るよりも人を漁ることを教へると言ふ、その文句を繪に現して居る立派な丸い墨であります。

私は今から二十餘年前に上海でマリヤの像のついた明墨の破片を見ました。之で見て文房具にまで宗教

が及んでゐることが知られます。清朝の乾隆の製墨の進歩したのも多少の歐化が及んでゐるのだらうと思ひます（乾隆後から嘉慶にかけては名墨があります。嘉慶の頃には乾隆の製墨者が残つて居たからです。道光になる

と製法が下つて其の後はガタ落ちになり、近年は松煤に石炭煤を加へるので益々低下してゐます）。

一方では耶蘇教の布教師が信者を得、いろ／＼手廻を求めて布教に努め、その結果明の宮廷には七百名ばかりの信徒が出來たといふことが歴史に書いてあります。如何に彼等が上流に向つての宣傳に周到に努力したか此の墨の繪が明瞭に物語つてゐるのではないかと思ひます。

今日の如く色々な發明が盛んになつて、牛乳から纖維がとれたりするやうなことになりますと、硯や墨も必ずしも石や松烟ばかりから造るとは限らないことになるのではないかと思ひます。

### 筆

筆は禮記の曲禮に「史は筆にのせる」と云ふことがある。筆といふ言葉は昔からあつた。ところがその頃は漆で書く時代の筆で今の毛筆ではなかつたと思ひます。

それから秦の蒙恬が筆を創造したとあるが、果してさうであるかはよく分りません。蒙恬が毛筆に改良を加へたものだらうといふ説の方が本當ではないかと思ひます。筆の名稱は四つあります。湖南、湖北の楚の國では筆の字の竹冠のない「聿」といふ字を使ひます。南方の吳越の方では「不律」、燕では「拂」と



いふ字、之は「拂子」の形から來た意味ではないかと思ひます。それから秦即ち陝西、山西の方では「筆」と言つた。それで秦の筆は竹の軸であつたと文字の上から云つて居りますが、或はさうかも知れません。漢代の筆は象牙の軸を用ひたり、それに金の象眼を入れたり、玉なんかを飾つたりしてあるのがありました。繪でよくは分りませんが、筆史といふ本に載つて居ります。

それから筆の毛は狼、狐、羊等でありますが、秋の頃の子兎の毛が一番良いと云はれます。今でも矢張り普遍的に兎と羊が多くを占めてゐるやうであります。

屠隆の紙墨筆硯に製筆の法は尖、齊、圓、健を以て筆の四徳となすとありますが、毛が硬ければよく尖るので具合が良い。兎の毛の紫色になつたのを束ねて結ぶ時に丸くするが良い。そして其外側を狸の毛でつむむ。日本の昔のは鹿の毛らしい。廣東の南の番禺地方では羊、雉、鶏、鴨、それから狐、鼠の鬚、虎の毛、麝香鹿の毛、羊の鬚、更に又人間の胎兒の髪の毛、豚の剛毛、狸の毛などがありますが、矢張り兎の毛が一番良いと云ふことが昔から云はれて居ります。

白樂天の詩に「筆は尖がれること錐の如く、鋭きこと刀の如し。江南の石上老兎有り、竹を喰ひ水を飲んで紫毛を生ず。宜城の工人、その兎を獲り千萬毛中一毫を揀ぶ」とあります。千萬本の中から一本一本を選んで筆を造ると云ふ、之は事實のやうであります。湖州製の筆が一番良いと言つて居ります。

私が湖南の長沙に居りました時に「鶴狼毫」といふ筆を造つて居るのを見て來ましたが、平たい石板の

上に毛をのせて手の掌でそれを揉んだり押ししたりしてつくつて居りました。

鶴狼毛は山東から出る髓の毛です。外のところのものはいけない。軸は湘竹といふ紋竹を用ひ、軸の端に白い骨をつけて飾つてゐる。之は筆の正装ださうです。昔は贈物にする時に筆の上下に白い角か象牙をはめたさうです。此の遺風が湖南省其他にも残つて居ります。或は虫の入らぬやうに角をはめたものかとも云はれます。江南の湖州に私は一度行つて見まして、王一品とか貝松泉等の工場で専門工の仕方を見ました。之は砥石の非常にすべつこいの羊の毛を載せて、砥の粉をふりかけ、極めて穏やかに毛を撫でる。實にゆつくりとして揉む如くしてこする。端溪の硯を磨く以上にゆつくりとしてゐる。砥いだ後は硝子板の上のせて上から透かして見て、毛並を上毛中毛並毛と分けて居ります。そして一番良いのは噴霧器で潤まして又砥ぎます。そしてから齒の小さい櫛で梳いて毛を撰み、仕上げた毛は漆塗の箱に入れて置いて幾日か経つて結へて筆にします。さういふ風にして作つた筆は使ひ古したものを又毛を擇分けて残つた良毛で作り直してくれます。

湖州では宿純羊毛を最上として居ります。兎、猿、狸なども使つて居ります。宿毛とは羊の胎兒の毛ですが、仲々面倒なので、今は生れたての羊の毛を取るさうです。それから人間の赤ん坊の髪の毛は一度剃つたものはいけないが、うぶなものは生れてから百日位のを筆にしてよいものが出来るさうです。

私は往年蘇州に行きましたとき、湖州の王一品筆莊の主人に會つて懷舊談をしましたが、その時の話に



古い大きな店になりますと、羊を自分の處で飼つて、榮養を與へて、毛に油氣を持たせ又毛が強く丸味を係つやうにする、さういふ風にして育てて、秋になつてから毛刈るのだが、此の頃は戦争で羊は徴發されるし、職工は次第にとられてよい筆は造れない。造らなければ商賣にならないから羊の毛の短いのを兎の毛と交ぜて筆を造つて店の仕事にして居るが、近年は支那には本當に書の上手な人が少くなつて、一本五十圓か百圓もする筆を造つても一年も二年も賣れないと、非常に嘆息して居りました。其處で竹の筆を見ました。之は大きな字を書いたり、飛白の字を書くのによいさうです。打見たところでは大變硬いと思ふが水につけると割合に柔かい。日本で出来るものよりもしなやかであります。

木の皮で造つた筆があります。これは末の一端をたいて柔かくして筆にしたもので、これは幾らも書けません。少し書いたら捨てて了ふ。さういふのがありました。それからそこで見ましたのに、金泥をつけて、經文を寫したり佛畫を描いたりする筆は非常に小さな筆でひよろ／＼して居りますが、金泥につけると、しやんとなつてよく書けます。斯ういふ筆も今餘り賣れないさうです。

私は王一品といふ老人に筆の變遷に就て質問しました。その答に、元、明以來續いてゐるといふ大きな店には各代の製法が記録され、或は標本が残つてゐる。各時代に依つて字體が變つてゐるので、それに應ずるやうに筆を造らなければならぬ。字が先に變つたのか筆の製法が先に變つたか知らぬが、兎に何時代に依つて製法が變つてゐる。宋、元以來科學用の字體が時に依つて變つてゐる。又その當時に尊崇され

た古人の書法が或は歐陽詢とか顔真卿とかいふやうに變つて来る。その際に趙子昂とか、董其昌とかいふ大家が出て又書風を作り、それに依つて長い毫が欲しいとか、羊毛の筆が欲しいとかいふやうな一種の流行を成して擴がつて来るものだといふことを言つて居りました。成る程、宋の時代は大きな字だとか、明の字は少し硬い、清朝の字體は軟かいといふ風にちやんと型がある。一つ一つ見ると判らないけれども一緒に寄せて見ると變つて見えて來ます。今頃は科學の東縛がないので、自由だからどんなタイプでも出來ます。或は各種の筆が復活するかも知れません。

日本では今でも天平時代の筆を造つてゐる。東京の御徒町に筆屋があります。其處には「雀頭」といふ筆があります。之は昔お坊さんがお經文を寫す筆に使つたのであります。「鶏矩」といふ筆もあります。これは少し長い。そして強い。雀頭は京都の鳩居堂にもあると思ひます。鶏矩は東京にあつたやうに思ひます。弘法大師の傳を讀みますと、大師が唐に入つて書道を韓方明と云ふ人に學んで、今迄使つてゐた雀頭を棄て、長鋒を用ひ、六朝初唐の風を變へて顔真卿の體を學んだと書いてあります。その頃日本では短い毛の雀頭が用ひられ、弘法大師が歸つて來てから長くなつて來たのが傾向ではないかと思ひます。硬い毛、柔かい毛の筆といろ／＼ありますが、今後の文化の變遷に就きましても、筆の壽命や筆の變遷を感じるのも面白いことではないかと思ひます。從來湖筆、徽墨と並稱されるのは元代以後湖洲筆が本場となつてゐるのです。



## 紙

次に紙でありますが、私は紙の研究はこれからやるつもりで居りますので、大したお話も出来ませんが断片的に極く大體の處をお話することにします。

紙の起源 昔は文字は竹簡や板に書いたもので、後に、縑帛を用ひました。其の縑帛は書き終ると截つて、残りは又の用に致しました。宛ら今日吾々が巻紙を用ひて手紙をかくのと同じで、吾々の巻紙は漢以來縑帛の遺風かも知れません。

紙の字が糸旁になつてゐるのは、縑帛の遺形と思ひます。昔は紙を幡とよび又幅ともよび、一幡又は一幅とも呼びました。隋唐このかた一葉とか一頁と云ふやうになつたさうです。

蒲竹、蒲牒 紙の代用とされたもので、漢の路温舒は縑帛を持たないので蒲を截つてかいたさうです。

布紙 漢の蔡倫(尙方令龍亭侯)が布帛や魚網を煮て紙を造らせた。一名を網紙といふ(今のボロ屑で製紙するやうなもの)。これが一般に紙の始まりとされてゐます。

繭紙 王羲之の蘭亭序は繭紙に書いたとあります。晋の時代は繭で紙を造つたのでせう。朝鮮にもあります。今は日本にも繭紙でできた便箋や封筒があります。

穀紙 樹の皮で紙を作つた。椿や桑ですきます。

藤角紙 晋の范甯が藤角を以て紙を造らせたと文房四譜に出てゐる。

苔紙 晋の武帝は側理紙萬番を賜ふとあり、南越人の貢物である。海苔をまぜて紙を造つたもので、縦横邪側に紙理がある。今の朝鮮で出来る苔紙の如きもの。

黄紙 唐の貞観の頃は詔勅は黄紙にかき、臣下から提出する上表も黄紙を用ひた。黄色は染めたものである(清の詔書や奏聞等も矢張黄紙であつた)。寫經や佛典は黄蘗で染め蟲害を防いださうです。

麻紙 東宮舊事に、皇太子初拜して赤紙縑紅麻紙一百帳を給ふとあり、麻や木皮を以て作つたもので晋の王羲之等も用ひた。唐宋の間では黄麻紙、白麻紙に詔書や宣旨をかけたので、宣麻紙ともいつた。宋代に書籍印刷、即ち板本が始まつて、麻紙を用ひ、今も黄白麻紙の宋板書籍がある。

桑根紙 桑の根や幹枝の皮で作つたもの(日本の麻皮紙の類)で、寫經に用ひられた。紙幅は晋の頃は廣一尺三分、長一尺八分、小は廣九寸、長一尺四寸、後代は廣い長いものもある。

宣紙 之は日本でいふ畫宣紙で、安徽の宣城縣で出来る紙が、精美で書畫に適した。宣紙の名はこれから出てゐる、原料は桑、竹、楮皮も加はる。

澄心堂紙 凝霜紙 安徽の歙縣、黟縣に出来たのが最美質である。南唐の烈祖(李昇)が金陵(南京)に晏居(離宮)を設けて澄心堂と名付けた。其後、後主が造らせた紙を澄心堂紙といひ、後世模造がある。



安徽の楮、柳及び蘆が原料として勝れてゐたといふ。

玉屑 屑骨 四川は麻の原料が多い。玉屑や屑骨は麻紙である。四川雲南で出版した書籍は大抵麻紙の粗末なもので、一見して見分けがつく。四川は唐代の文人が往來して蜀牋といふ紙がいろ／＼ある。唐の名妓薛濤が造つた錦牋等は有名であつた。四川は特殊な文化があつて物質も豊富で學問も他省とは異なるものがある。

其他江蘇、浙江は嫩竹、桑皮、麥稈、稻稈、藤皮等の原料で製紙する。宣紙、運紙等がある。(高廉の燕間詩賞)

皮紙 雲南、貴州其他各地で桑、柳、楮、筍皮等の原料で作る。引きの強い紙で、南方では傘紙や油紙にも用ふる。高麗紙と呼んでゐる所もある。

綿紙 前の皮紙に似て棉を加へたものといふ、明の出版物に多い。朝鮮のものによい丈夫なのがある。

開花紙 宣紙の特製で白い。厚いのは清朝の官用(田版等)、科學の答案紙、殿版(官版)、宮廷の寫本、四庫全書の用紙、圖書集成の印刷用紙等、又黄色のものもある。

佛像や芝紋等のスキの入つた乾隆及び後代のものもある。

又蠟紙といふのがある。松とか龍とか鳳凰とかいろ／＼の模様をかいたもの、乾隆製は特に珍重されて

ゐる。後の模造もある。

この外、官堆、毛邊、竹連史等々今日の普通用ひられる種類は數々ありますが、それらに就いては別の機會に譲りたいと思ひます。

(昭和十六年三月)



## 擁爐瑣言

## 北京の學界

支那の南方は、政治問題が山積して新政府の下に向背を争うて居るので、學界に目新しい進展を見る事ができない。比較的政治的核心を隔て、居る北京は、亂脈にはなつても穩かさがある。軍閥政府が置き去りにした大學が形體を留めて、油氣のぬけた車轂の如く輪轉力を失つてをる。

浙江派の學者馬衡氏兄弟、沈尹默氏、沈兼士氏等が、大に幅を利かせて、大學を占領して改革も組織もやつてをる。馬氏は財産家であり、沈氏兄弟も可なりの家資をもつてをるので、活動ができる。大多忙で車輪をまはしてをるが、南京政府から經費さへ不足なく支給すれば、各大學も進展するであらうが、それがまだ不十分らしい。彼等が政治色彩を帯びて純學究的でなくなつたのも無理からぬ現状と思ふ。

そんな渦中に飛込んで野次りもせずに居るのが吳承仕氏の如き、又少壯な孫人和氏の如きで、月給を離れても自己の研鑽には差支へなく専心してをる。彼等の中で人物學問ともに一頭地を抜く輔仁大學校長兼燕京大學教授陳垣氏は、政治の圈外に世波を乗り切つて、研究をすゝめ、最近の新著「史諱學例」一冊を

私に贈與された。支那歴代帝王の諱を避けて別の字を用ひて書いた其の例證を細密に考査し、書籍や其他の記録に顯れて居るものゝ外に古い碑文等に就て一々例證し、其諱を避けたものに就て研究すべきいろいろな注意と事例を挙げたので、陳氏が歴史家としての立場は無論、文學上に就ても有益な新著である。北京清華學校から、定期出版の清華學報が最近第五卷第一期を刊行した（六月定刊の遅延）が、その中には朱希祖氏の「中國古代鐵製兵器先行於南方考」の考證論文が載つてゐる。鐵器の研究が頗る緻密である。

北京の北海公園にある米國文化事業の圖書館の主事であり、中國圖書館協會の科長である錢稻孫氏は、前清で著名な外交官錢恂氏の長男で、極めて温厚な平和な人である。今回「儒林外史」と云ふ支那で最も有名な小説を日本文に譯してをる。其の第一回を送つて來たが、仲々巧妙な日本文の筆致であつた。

こんな風に學問上の交情には排日氣分の入る隙がない。純眞な研究には塵埃を點することのできない證據と思ふ。但しこれが事業となり團體となると争ひが生ずる。

## 書籍の魅力

古今の珍籍善本を網羅し古今文化の源を涵潤して、目前の小功利那的利益に止まらず、其効果を百世に期する文獻の下には必ず純眞な學究が集まる。諸國から善良な人士が書香に牽かれてくる。經濟界に於け



る金の魅力より以上に書籍の力は大きい。清朝の四庫全書や明朝の永樂大典が、國は亡び時代は更つても歴々として文化の源泉を百世に貽して、内國のみならず、各國から崇敬され羨望されてをるのを見ると、其當時の帝王や名臣の功業は後人の記憶から消えても、書籍は不朽に魅力を發揮してをる。四庫全書あるが故に乾隆帝を聯想し、永樂大典の名の下に明の成祖の事も併思されるのである。

日本に存する支那の文獻

日本には唐以上の文獻が、正倉院や内閣書庫や宮内省圖書寮や富豪の家等にあつて、支那に見られないものがある。支那には宋以後のものはまだ、澤山官私の書庫に疊々として、到底日本の及ぶ所ではないが、此頃支那の研究家が日本に存在する珍本に涎を流して、何とかして研究慾を満足せんと、一二冊の珍書を見るために、態々日本へ出掛ける人が少くない。私は度々そんな人を送迎する。如何に排日を絶叫し帝國打倒を威嚇しても、學界の至寶には心から頭が下がるのである。これは算盤珠で弾き出す筈ではないと思ふ。

大連圖書館と北京學者の聯絡

一小例であるが、大連圖書館に明の小説の「警世通言」と言ふ一二冊缺けたものがある。此の小説は支

那では北京の孔徳學校に缺本で收藏してある。日本では名古屋の徳川侯爵の家藏があるだけで、東京帝國大學では目下それを借りて寫してをる。

北平の孔徳學校教授馬廉氏は、態々大連圖書館に警世通言を見に來た。其の際大連圖書館と將來書籍を有無相通するやうに聯絡して、馬氏の懇願によつて警世通言を貸渡して、先方の不足を補寫させ、當方の不足分は先方で補寫して呉れた。其の後北海圖書館や其の他の學者とも藏書を互に交換補充するやうに温かい聯絡が大連圖書館と結ばれて來た。鐵道の延長には頭痛を悩む支那人士が、書香の下には隔意なく知識の交換を吝まない。之は味ふべきである。

此の頃では、珍籍善書が出ると、かへつて北京の學者から購入を勸めて來るやうになつた。五六年前迄は日本人が書籍を購入すると聞くと大に防備し陰に陽に妨害したのが、此の數年來北京の學者達が厚意を以て迎へるやうになつたのは、大連に持去つても快く研究者を満足させて呉れると云ふことに安心したらしい。そして歐米に持ち去られることを甚だしく恐れて死別と同じだと云つてをる。此の際こちらに充分の収集をして先方の學者に開放して學問の至公至平なところを實踐して見たい。それには大連は頗る地の利を得てをる。人の和も此の方面から得れば永遠的であり且つ鞏固である。さうなつてくると、人間愛が相互に成つて多少の支吾は快く堪忍し容赦してゆけると思ふ。巨眼の士は必ず此の點に注視して居るに違ひない。



犬塚新太郎氏銅像の銘

これまで旅順や大連附近にある碑碣等の金石文で、其の道の人の視線を惹くものは甚だ稀である。白玉山の表忠碑は鹽谷青山翁の作であり、日本人の作中では随一であるが、之に比肩するものは見あたらない。つた。

昨年末に星ヶ浦に雄姿をあらはした故滿鐵理事犬塚新太郎氏の銅像は、像そのものも傑作だが其の下に刻まれた銘辭は、從來旅大附近で見ることのできない堂々たる文字である。聞く所に據ると銘の作者は、北京で其の人ありと云はるゝ少壯の學者孫人和氏の得意の莊重な筆を揮つて起草したものださうである。記事のところも簡にして要を得て居り、殊に銘辭の韻文が力ある抒述であり、何とも云へない古典的な剛味と柔味が點綴されて、一寸日本の學者でやれないところがある。五洲雜居の大連、東西の具眼者が遊息する星ヶ浦に於て、俊髦の犬塚氏を顯揚するには、あの文字であれば恥づる事はないと思ふ。

和孫人氏は三十餘歳の秀逸である。中國大學教授として歴々の學者の間に軒輊してヒケを取らぬ學者である。日本から留學した人で孫氏から裨益を受けて居る人が少くない。其の著書には「論衡校正」、「抱朴子校正」、「聲韻學」(中國大學の講義録)等が出版されて居る。彼の文章は學者間に定評がある。孫氏は眇然たる小丈夫で、一見したところ安ッぽく思はれるが、仲々きかぬ氣の男でどこまでも研究を進める

力を持つて居る。將來大成する人として囑望されて居る。彼の藏書も仲々面白い重要なものを集め、極めて質素な書齋に口角泡を飛ばして論評する元氣を見ると、星ヶ浦の銅像銘が思ひ合はされる。斯道の研究者は、名ばかり高い老儒の顔を拜んで歸るよりも、孫氏の如き少壯の研究者と接近するのが有益と思ふ。

支那語と支那文學

近頃大連有爲の青年たちに、支那語研究が旺盛になりゆくことは何たる嬉しいことであらう。それを事業方面に力を伸ばすことは無上の利益であらうが、私には其の方面を云々する資格がない。

從來日本の學者で支那文學に志すもので、最も缺けて居るところは支那の音韻に暗く、其の眞味にたどりつけないで居ることである。

今のやうに支那語研究に目ざめて來た有爲の人々の中に、將來新しい開拓を要し、組織や系統を立てねばならない支那文學の方面に進展する勇猛心を抱く人があれば、先づ語學から入つて、音韻學の研究に進んでから小説でも戯曲でも韻文の方面でも、自己の好む所に進むのが本當のやりかたである。此の方法で年月を積んだならば必ずしも本國の人に遜色なくやれると思ふ。支那の學界には各方面に寶の山が横はつて居る。此の寶の山は何時でも發掘すべく篤志の人を待つて居る。歐米人の支那學研究が勃興しつゝある時に、日支兩國の同學者は相携へて、歐米の研究家を指導してやる責任がある。歐米人がまるで自己の



國語と系統の異なる支那語に取りついて、然も言語に止まらず内容の講究に進む勇氣と努力とは、日本人が語學だけで卒業したつもりで居るのは餘程の差がある。學問は何國の人でもよい、徹底してくれればよいのであるから、東西を問はず先覺者は後覺者を親切に導き援けるべきである。

軟 文 學 (小説類)

軟文學の研究は入り易いやうに思はれて其の方面に向ふ人があるが、取りかゝつてみると小説程六ヶ敷いものはないやうに思ふ。著者が蘊蓄を傾けて自由自在に抒述したので、俗語雅言、故事出典等が雑多の源泉をもつて居り、容易に解けないし、又作者の理想や寓意や諷刺等を玩味するのは大抵のことではない。

支那小説を研究するには、支那語に熟通するのが第一要素であるが、其の外に普通學として通過して置かねばならないものがある。それを無視すると、研究が進むに従つて進退谷まるのである。その普通學乃至常識を素養するには、支那の四書の如き五經の如き、歴史や諸子の主なものを淺くとも一渉りして置かないと、初歩の間は差支がないやうでも、少し深入りして來ると必ず障壁に打つかる。小説や軟文は硬文學と絶對に血の道が通つて居ないやうに思ふのは大間違ひである。支那小説と云つても古來數多くある。それを皆概括的に知つて、うすばんやりとした知識に止めるよりも、或時代のもの又は或書籍を限つて、

専心に深入りするが成功し易いと思ふ。日本人が從來餘り多く着手しない、支那の諺もの彈詞の如き譬詞の如き或は各地方の歌謡の如きもある。又は佛教の教理を經緯にした小説や戯曲も澤山ある。此等も手をつけ初めると興味多いものである。兎に角間口狭く奥行き深くやるのが今後の文學研究の方法と思ふ。北京や上海南京方面には此方面の研究家が居るので、獨學でやらすに師承を求むるが捷徑である。

書 香 を 追 う て

廣東の學者黃節氏の添書を持參して、羅覺源と云ふ人が訪れて來た。金石學にも通じ書畫や古書の藏弄に富んでをるさうである。頗る機敏な四十男である。今回日本に渡つて諸家の珍藏のものと自分のものと對照して研究して見たい、要するに日本にあつて支那にない書籍や、支那にも日本にもあつて珍藏されてをるものを、對照比較して知識を進めたいと云ふ希望である。

羅氏の所持品の中で、飛びつきたいのがあつた。宋拓の「聖教序」、宋拓の柳公權の「秘塔銘」、宋拓の「褚河米跋蘭亭帖」、明嘉靖刻「杜詩千家注」。朱や墨で名家の書き入がある。又「唐寫經」(日本から流れたもの)「宋寫經」(同上)。

此の外數種を見せてもらった。羅氏は云つた。賣りにゆくのぢやない。日本人の珍藏と比較研究にゆくのだと、つまり日本の書香を追うてゆくと云ふ、篤志を私はうれしく思つた。矢張り書籍の魅力だ。學問



の共通だと思つた。たゞ遺憾なことは大連には比較研究させるものが無いのである。こんな人を素通りさせることを残念に思つた。

欽定大學石經

清朝の嘉慶八年に、北京の國子監内に建てられた石に刻した十三經である。唐の開成年間に山西に石刻十二經が建てられた。もつと古くは漢の石經があつた。それで清朝でも之に倣つたものである。其の由来を少々尋ねてみたい。

石經の書きて

乾隆の進士、江蘇省金壇の人、蔣衡（原名振生）字は湘帆。一字拙存江南拙叟、函潭老布衣等の別號がある。書家で學者であつた。其の著書に「拙存堂詩文集」、「拙存堂臨帖」、「易卦私箋」がある。

蔣衡は五十六歳の時、發願して十三經全部を楷書で書くことになつた。朝から夕まで寒暑を厭はず十二年間で書き終つた。此事を江南河道總督の高斌と云ふ人が乾隆帝に奏請して石に刻つて太學（國子監）に建て、それを拓本にとつて天下に頒賜することにした。朝廷では蔣の功勞に酬いるために、英山の教諭に任じ、又は博學鴻詞の位地を與へんとしたが、恬淡な蔣はいづれも辭退して受けなかつた。

石に刻ることは乾隆五十八年に詔勅が降つて取りかゝつたが、蔣が寫した原本が民間の通行本で誤字があるので、嘉慶八年に多くの古版や善本に依つて訂正して建てたのである。

碑數、字數及び排置

周易、六碑、字數二四、四三七

一碑は修道堂の左側に東向にある。

二碑から六碑は東向にある。

尙書、八碑、字數二七、一三四

修道堂側東向

詩經、十三碑、字數四〇、八四八

修道堂側東向

周禮、十五碑、字數四九、一五六

一碑から四碑迄修道堂東向

五碑から十五碑迄正義堂東向

儀禮、十七碑、字數五七、一一八



- 正義堂、東向
- 禮記、二十八碑、字數 九八、九九四
- 一碑から五碑迄正義堂、東向
- 六碑から廿八碑迄廣業堂、東向
- 春秋左傳、六十碑、字數 一九八、九四五
- 一碑から七碑迄廣業堂、東向
- 八碑は廣業堂右側、北向
- 九碑は崇志堂左側、北向
- 十碑から三十九碑迄、同上、西向
- 四十碑から六十碑迄誠心堂、西向
- 春秋公羊傳、十二碑、字數 四四、七四八
- 誠心堂、西向
- 春秋穀梁、十一碑、字數 四二、〇八九
- 率性堂、西向
- 論語、五碑、字數 一六、五〇九

同上

孝經、一碑、字數 二、一一三

同上

爾雅、三碑、字數 一〇、七九一

同上

孟子、十碑、字數 三四、六八五

同上

合計碑數 一七九

字數 六四七、五六〇

帖に仕立て賣買してをるのには、乾隆の御製序、丁祭釋食詩、御製說經文等十三石を加へて欽定太學石經として凡そ四十帖に裱装してある。

唐の石經に比較すると、書風も見劣りがする。内容の文にも多少差異がある。併し清朝が學界に貽した一事業であることは云ふ迄もない。書者の蔣衡の努力は實に不朽に傳ふべきものと思ふ。そして報酬を受けないところも稱すべきである。

乾隆五十六年十一月二十一日の上諭に、漢唐宋以來皆石經の刻があつて、聖賢經傳を考定して、文字の



異同を一定したことは藝林に嘉恵し爰議を昭無するのであるから、清朝でも實行せなくてはならないと云ふ意旨の詔勅があつて、此の事業の役割が左の如く定められた。

總裁 和坤、王杰

副總裁 金簡、劉墉、董誥、彭元瑞

校勘官 金士松、阮元等八名

其の他事務官として阿克當阿等二十九名が石經設立に當つたのである。仲々手がかゝつたもので、それが嘉慶八年に完成した。

右に擧げた字數は「武英殿石經字攷」に據り、碑數と位置は「順天府志」、蔣衡の「曝書雜記」及び「清代文獻通古錄」から拾つたのと、度々其の所在地に遊んだ記憶によつて略叙したのである。

(昭和四年)

## 跋

松崎先生は昨昭和十七年北京に於いて古稀を迎へられた。頃來健康に恵まれ、日夜支那學の研究に没頭して倦むことを知らぬ先生である。我々はこれを心からの喜とし、また常に親しくその教を請ひ得ることを大なる幸とする。

曾て先生が滿鐵に招かれて大連に生まれた頃、先生の學徳を慕ふ者、志を支那に有する者などが集つて先生を中心とする會をつくつてゐた。名づけて柔父會といつた。先生若くして柔甫と號し老來柔父と號せられる。柔父會同人は先生に請うて毛詩、楚辭等の講筵を開き各種支那に關する清談を聴き、また公私その教を受けることを



常とした。先度の還曆には同人の手に成るさゝやかな文集を出した。その音頭は石本憲治兄がとつた。

曾ての同人は滿洲事變、支那事變、大東亞戦争と引續く非常時局に際して四散し、東亞の各地に於いて戦時下の重要任務に服してゐる。先生も亦支那事變中に華北交通に迎へられて北京に移り住まれた。石本兄は滿鐵理事在任中、滿洲事變の激務の裡に病没した。今は音頭をとる者もなく舊同人に相談することさへ困難なので、古稀の祝賀方法は舊同人の意思を忖度して小生が勝手にきめた。それが本書の刊行となつたのである。

刊行は二冊を豫定し、先生の支那に關する述作のうち比較的一般向の小論文を選んで一冊とし、隨筆、講話等を纏めて一冊とした。何れも一度は雜誌、冊子に發表されたものが多い。が、由來、日本

よりも支那に有名な先生のことであり、發表も外地でされたのが多いから、読者はかなり偏つてゐたと思はれる。我々はこの機會に新に志ある人々に讀まれることを希望し、その結果が必ず讀者を益すること尠からざるべきを確信する。

本書の編纂に關する諸々の仕事は柔父會同人で大連滿鐵に残つてゐる田口稔君がやつて呉れた。出版は先生を識り且つ先生の女婿杉村勇造君と交ある座右寶刊行會主宰後藤眞太郎君が快く引受けて下さつた。陰でいろいろ力を貸し心遣をして下さつた方も多いことと思ふ。それ等の方々に厚く御禮を申し上げる。

昭和十八年二月

在北京 加藤新吉



不許複製

出文協認ア 370326 號  
柔父隨筆與付



昭和十八年九月二十五日 印刷  
昭和十八年九月三十日 發行  
初刷二〇〇部

著者  
發行者  
印刷者  
印刷所  
配給元  
發行所

定價 三圓八十錢  
特別行爲稅相當額 二十三錢  
合計金 四圓三錢

松崎鶴雄  
東京都日本橋區江戸橋二ノ八  
後藤眞太郎  
東京都在野區東戸越四ノ七  
笠井朝義  
東京都在野區東戸越四ノ七  
笠井印刷所  
東京都神田區淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社  
東京都日本橋區江戸橋二ノ八(松崎ビル)  
座右寶刊行會  
電話日本橋二〇八一・二四五六番  
根野口座東京七四五三番  
會員番號 一一〇一五

本會出版部にて萬一落丁・風丁等御發  
見の際には御申出次第御取換致します  
(製本 下島大宛堂)



近 刊 豫 告

志賀直哉著 暗夜行路 本文六〇八頁 色刷挿圖八葉	志賀直哉編 改訂版座 右寶 色刷一色版共 百數十版	村田治郎著 滿洲の史蹟 本文四七〇頁 圖版一五〇頁	澤柳大五郎譯 ギンケルマン 希臘藝術摸倣論 本文二〇〇頁 圖版三十二版	中野 勇譯 ワイルディングアゴシツク美術形式論 本文三五〇頁 圖版一五〇頁	藤枝 晃譯 ル・コック 西域紀行 本文三八〇頁 圖版八十版	後藤眞太郎編 華岳素描 木版ダイア 二十二葉	奥田誠一著 宋胡錄圖鑿 本文八〇頁 圖版一〇九版	瀧 精一著 瀧拙庵美術論集 日本篇 本文四四五頁 圖版一二〇版
-----------------------------------	---------------------------------------	------------------------------------	--	--	--	---------------------------------	-----------------------------------	--

(以上定價未定)



重 版 豫 告

濱田耕作著	考 古 學 研 究	八 三〇〇
濱田耕作著	日 本 美 術 史 研 究	六 三〇〇
濱田耕作著	東 洋 美 術 史 研 究	七 三〇〇
水野清一著 長廣敏雄譯	龍 門 石 窟 の 研 究	四 〇七〇
長廣敏雄譯 リイグル	美 術 様 式 論	七 三〇〇
原田淑人著	東 亞 古 文 化 研 究	七 三〇〇
小野勝年著 日比野丈夫著	五 臺 山	五 三〇〇



963
112



終

